

---

# 性別人間と幽靈人間

凧金

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

性別人間と幽霊人間

### 【NZコード】

N9628Z

### 【作者名】

嵐金

### 【あらすじ】

高校2年生へ進級を果たした安藤未来。

春になり、部活動の勧誘がスタートする中、未来は、勧誘先で従兄弟に再会する

## プロローグ

吸血鬼、吸血天使、天界少年、魔界少年、人間天使……ここ数ヶ月で、色々な者に遭遇して、そのたびに何かを得て、何かを学んできた。

暁文のおかげで、自分に自信を持つことが出来た。

グレイのおかげで、自分の良さに気付く事が出来た。  
瀬夏のおかげで、子供嫌いが治り、今は小さい子が可愛いと思えるようになった。

カラスのおかげで、素敵な彼氏を見つけることが出来た。

紅丞さんのおかげで、心から人を好きになることが出来た。

これからも、何かに遭遇して、そのたびに何かを得て、何かを学ぶだろう。……そんな気がする。

……って、いきなりエピローグのような感じになってしまったが、  
これはあくまでプロローグ。

今回は、幽霊体質になつた人間と、久しぶりに再会した従兄弟の話。

4月。私は高2に進級し、紅丞さんは人間に戻り、無事に学校への復帰を果たした、月の後半。

「未来くーん！！大ニユース大ニユース！！」

朝。綾子が、人がまばらに集まつた教室で、大声で、しかもあるう事か”くん”付けで話しかけてきた。

「綾子……あんたねえ、いい加減にしないと私もそろそろ怒

「あーあー！説教なら後で聞くから！！それよりも大ニユースだよ

！！」

「まつたく……何？」

「1年生に、スッゴくカツコいい眼鏡の男子がいるんだって！！もしかしたら、佐川先輩以上かもよ！？」

カツコいい男子がいるなんて、正直な所、興味ゼロなのだが、”佐川先輩以上かも”と言う言葉に、少し力チンと来た。

「……紅丞先輩以上？」

「そう！！噂によると、近寄った女子はみんなその男子に惚れちゃうほどカツコいいらしいの！！……もしかしたら、未来も惚れちゃうかもよ！？」

綾子は何故か、ほかの誰よりも早く、私と紅丞さんが付き合つてることと、同棲していることを探り当てた。私も紅丞さんも隠してたのに……もしかしたら、探偵にでもなれるのかもしねない。

「……あのねえ、私は顔で紅丞先輩を選んだわけじゃないの。たとえ、その男子が紅丞先輩よりもかつこよくても、惚れるわけないでしょ。」

私は、紅丞さんの事は、家では”紅丞さん”だが、学校では”紅丞先輩”と呼んでいる。

「ヒューッ！ラブですねえ安藤未来さん！」

「はいはー……。」

「……でさつ、私ね、今日はその男子に、会いに行こうと思つんだ。  
だからさ、未来も一緒に行かない？」

「わ、私も？……なんで？」

「本当に惚れちゃ わないかどうか、確かめたいのさー……ついでに、  
演劇部の勧誘とかしちゃ えば？」

確かに、去年から、演劇部には女子の入部希望者が耐えない。

紅丞さんがいるのが原因なのは目に見えているが。

「でも、確かにこれじゃあ、演劇部がキヤバクラになりかねないか  
らな……うん、私も行くよ。」

「ありがとー未来ー。」

「で、その男子、なんて名前なの？」

「確かねえ……津谷陸つたにって言つんだって。」

「津谷、陸……あれ？……どこかで聞いたことあるよつな……？」

「ん？もしかして、知り合なじい？」

「いや、多分氣のせいだと思う……多分。」

「そつか。じゃあ放課後に津谷君の所に行つてみよーーー！」

綾子は意気揚々と自分の席に戻つていた。

## 部活

私は今、演劇部の活動拠点 講堂にいる。

今の時期、演劇部は、活動してはいなく、色々な生徒に勧誘をしてまわっている……いわば、勧誘期間真っ盛りなのだ。で、今日は勧誘方法の作戦会議の真っ最中。

関係者以外立ち入り禁止なので、綾子には講堂の外で待つてもらっている。

会議終了。

ある生徒はそのまま帰り、ある生徒は勧誘に行つた。

私は、ちょうど津谷陸の話を出したところ、そいつを勧誘しにいって言わされたので、綾子と一緒に行くことにした。

「ついた、ここだよ。」

1年3組の教室前に到着。

「でもさ、綾子。もう放課後だし、さすがに帰っちゃったかな？」  
意外と会議が長引いたし、有り得るかも。

「いやいや、聞いた話によると、津谷君は、辺りが暗くなるまで帰らないらしいよ。もしかしたらまだいるかも。」

綾子はそう言いながら、教室の扉をノックした。  
ガラツと、扉が開く。

「はーい?……あれ?」

そこにいたのは 見たことのある人物だった。

## 再会

噂の男子、津谷陸。

その姿は、眼鏡をかけてはいるが、確かに顔立ちがよく、見た女子全員が惚れてしまうのも頷ける。

そして、彼の顔には、見覚えがあった。

「えつと……誰？」

彼は綾子の顔を見ながら質問した。

「私達、演劇部の勧誘で来ただけど……。」

演劇部でも無い綾子が話し始めた。

「演劇部？」

「あつ、私は演劇部じゃなくて、こっちが演劇部なの。」

と、言いながら、綾子は私の方を見た。

「えつと、そっちの人は……もしかして、安藤未来？」

名前を言い当てられた。

やつぱり、私はこの人に会つたことがある。

「……もしかして、陸？」

「やつぱり、未来だよなー？」

陸の顔が一気に明るくなつた。

「未来だーー！久しぶりーー！」

そして、あらう事か、私に飛びついてきた。

「うわっ！？ちょっと、陸！離れなさいーー！」

「え？あ、ごめんっ。」

陸は私から離れた。

その光景に、綾子は目を丸くしていた。

「え？え？……未来、津谷君と知り合いなの？」

「えつと……私の、従兄弟なの。」

「い、従兄弟おーー！初耳なんだけどーー？」

「私も、会つまで忘れてたのよ。」

それを聞き、陸が食いついた。

「未来、忘れるなんてひどいよ。」

「「」めん……。」

なんか、綾子と陸つて、キャラがかぶつてる気がする……。

「……で? 今日はどうしたんだつけ?」

陸がワクワクしながら聞いてきた。従兄弟相手に勧誘つて、なんとなく罪悪感が……。

「えつ……と、陸、何部に入るか決めた?」

「んー……まだ。」

「演劇部とか、どう?」

「演劇部ねー……まだ迷つてる。でも、未来が入つてほしいって言うなら、入るけど?」

「じゃあ、頼めるかな?」

「おう。……顧問に入部届け、出せばいいんだつけ?」

「うん、それじゃ、またね。」

「はーいっ。」

私たちは、講堂に戻ることにした。

講堂に戻ると、紅丞さんが勧誘に行かせた生徒を待っていた。

「紅丞先輩！」

紅丞さんに駆け寄る。

「あ、やっぱり未来だつたか。」

「”やつぱり”って、どういう事ですか？」

「未来の足音が聞こえたんだよ。」

「あ、そう言うことですか……。」

紅丞さんは、4月の始めから、月の中頃にかけて、ある事件が原因で、人間ではなく天使になつてしまつていた。だが、カラスのアイディアのおかげで、無事、人間に戻ることが出来た。でも、完璧な人間ではなく、私のように、人間ではない力を持つ事になつてしまつたのだ。

その力と言つのが、「五感がランダムにパワーアップする」というもの。

簡単に説明すると、特に何もしていらないのに、聴覚・嗅覚・味覚・触覚・視覚のうちどれかが、ランダムに選ばれ、飛躍的にパワーアップしてしまうということ。

……パワーアップの限度は決まつてゐるようなのだが、どのタイミングで、何をパワーアップさせるのか、は選べないようで、本人はいまだに慣れることができずに困つてゐるらしい。

この前なんか、睡眠中に聴覚がパワーアップしてしまつて、自分の心臓の音が邪魔で一睡も出来なかつた、と語つてゐた。

「……てことは、今、聴覚がパワーアップしてゐ、つて事ですか？」

私は綾子から離れ、綾子には聞こえないくらいの小声で質問した

小声でも、今の紅丞さんには普通の音量に聞こえるだらう。

「ああ。……ついでに言つと、嗅覚もパワーアップしてゐる。」

「それは、大変ですね。」

「大丈夫だよ。」

小声で会話する私たちの後ろで、綾子がニヤニヤしながら私たちを見ていた。

「……ちょっとすみません。」

紅丞さんに断りを入れ、綾子の元へ向かう。

「ちょっと、綾子。何ニヤニヤしてんのよ。」

「いやあー、小声で何話してんのかなーなんて思つて……。」

「別に、何でもいいでしょ？……『気にしないでよ。』

「カツプルの会話ほど気になるものはないよ?」

「はあ……つたく……。」

「で?先輩に津谷君の事、言つた?」

「あ、言つてなかつた。」

「……未来い、最近凡ミス多いよ?幸せ疲れですかあ?」「嫌みつたらしく言わなくていいから。」

とりあえず先輩の所に戻る。

「……紅丞さん、聞いてました?」

また小声で話しかける。

「ああ。……新入部員か?」

「はい、それも、私の従兄弟なんです。会うのは……だいたい、5年ぶりくらい何ですけどね。」

「へえ……従兄弟……。」

「何故ジト目……。」

「私、別に浮気しませんから。」

「まあ、それなら良いけど……。」

すると

「あつ……。」

「どうしました?」

「嗅覚が元に戻つた……。あ、でも視覚がパワーアップした……。」

「……なかなか休まりませんね。  
「ああ…本当、困つてゐるよ……。」

「その時、

「未来ー、何してんのー。」

しごれを切らした綾子が私を呼んだ。

「……なんか、すみません。やっぱり綾子は帰らせるべきでしたね  
……。」

「いや、別に大丈夫だけど……。」

私は再び綾子の元へ行つた。

「……未来くん、愛し合つのは構わないが、私の存在を忘れないで  
くれよ?」

「わかつてゐよ……。」

「……じゃ、私、用事思い出したんで、帰るよ。後は2人でお幸せ  
にー。そんじやつ。」

綾子はカバンを持って帰つてしまつた。

「なんなのよ、まつたく……。」

「未来。」

後ろから紅丞さんが私を呼んだ。

「何でしよう?」

「俺たちも、もう帰るか。」

「でも、ほかの部員を待たなくていいんですか?」

「いや、ほかの奴らは、さつき帰つた。」

「え、じゃあ私が最後の1人つて事ですか?」

「そう言つことだ。……じゃ、帰るか。」

紅丞さんは、近くにおいてあるカバンを持って歩き出した。  
も後に続いた。

私

## 手紙

「紅丞さん、ちょっと、教室に行きたいんですけど、良いですか？」

「忘れ物か？」

「はい。……ノート忘れちゃって。」

「わかった、一緒に行くか。」

「はい、ありがとうございます。」

俺と未来は、2年4組の教室に向かつた。

「ちょっと待つてくださいね。」

未来は俺を入り口に残し、教室に入った。

窓側の、一番後ろ。恐らくそこが、未来の席だらう。

「……あれ？」

机の中を探していた未来が、そう呟いたのが聞こえた。

「未来？どうかしたのか？」

「なんか、手紙が入ってるんです……。」

手紙？まさか……ラブレター？

俺はとりあえず教室に入つた。

「あ、勝手に入っちゃダメですよ。」

「いいだろ……で、手紙ってなんだ？」

「これです。」

未来が机から出したのは、茶封筒に入った手紙だった。……「丁寧に、封に糊付けされている。

「誰からだ？」

「差出人が書かれてないんですけど……開けて見ますか？」

「未来が見たいと思うなら、開けてもいいんじゃないかな？」

「では、失礼して……。」

未来は指で器用に封筒を開け、中から手紙を取り出した。

「な、何？これ……。」

未来の顔が真っ青になつた。俺も手紙を覗いてみた。手紙には、まるで血のような真っ赤な字で、”お前に絶望を味あわせてやる。”とだけ書いてあった。

「不気味だな……。」

「一体誰が……。」

未来は脅えるように、封筒に手紙をしまつた。

「未来、そんな物、捨てた方がいい。どうせ誰かのイタズラだろ。」

「そう……ですかね。」

「ああ。……何かあつても、俺が守つてやる。」

「紅丞さん……ありがとうございます。」

未来は、手紙を封筒」と、くしゃくしゃに丸めてゴミ箱に捨てた。

「……それでは、帰りましょうか。」

「ああ。」

俺たちは玄関へ歩き出した。

……誰かのイタズラにしては、やり過ぎだと思つ。だって、あの手紙の字……未来には言えなかつたが、俺は今、視覚がパワーアップしてこるので解る。

あの字は、どう見ても 人間の血で書かれていた。

……妙な胸騒ぎがする。

帰る前に……

「紅丞さん、聴覚、今どうなっています?」

「玄関で、未来が俺に質問する。

「まだパワーアップしたままだ……。」

「そうですか……それでは、聴覚が戻るまで、少し待ちますか?今外にでると、車が凄いみたいですし……。」

確かに、玄関からでも、外の車の走行音が耳に入る。

「そうだな……少し待つか。」

とりあえず、廊下にあるベンチに、一人で腰を下ろした。

……しばしの沈黙。遠くにある体育館からは、バスケットボールが弾む音が聞こえる。多分、バスケ部が部活中なのだろう。……それよりも……

「……未来。」

「何ですか?」

「もう少しつついてもいいんじゃないのか?」

未来は何故か、俺から30cmくらい離れた所に座っていた。

「いや、だって、私が近寄つたら色々面倒になるかな、と思いまして……。」

「面倒?……どうこう意味だよ?」

軽く未来を睨む。

「いや、その……紅丞さん、今聴覚がパワーアップしてるんですよ

ね?じゃあ私が近寄つたら、私の心臓の音が聞こえて、耳障りかな

ーと思いまして……。」

未来は申し訳無さそうに答えた。

「はあ……今更何言つてんだよ。」

「えつ……?」

「俺は、例え未来の心臓の音が絶えず聞こえるような環境に置かれても、その音さえも愛せるという自信があるぞ。」

「…………」

未来の顔が赤くなつた 可愛い奴だな。

「あ、ありがとうございます……。」

未来は恥ずかしそうに、俺にくつろつくりに座り直した。

トクツ、トクツ …… 直接聞いてるわけじゃないのに、未来の心臓の音が鮮明に聞こえる。もちろん俺自身の心臓の音も鮮明に聞こえる。

実は、脈拍が違う二つの音が、偶然重なる時があるのだが、俺はその音が好きなんだ。…… 未来には内緒だけどな。

「ふふふ……。」

つい、口元が緩んでしまつた。

「紅丞さん?……今、笑いました?」

「いや、ちょうど、未来と俺の心臓の鼓動が、ほぼ同じくらいいのタイミングで重なつて……なんか面白くて……。」

そう言つた途端、未来の心臓の鼓動が速まつた。……ああ、タイミングがズレしていく……。

「おい、何照れてんだよ、タイミングがズレたじゃないか……。」

「うひ、ひるさいです。気にしないでください……。」

「そつは言つても、聞こえちまつしなあー……。」

俺は嫌みっぽく答えた。

「……やっぱり私、離れた方がいいですか?」

「いやいや、そんなこと言つてないから。」

「でも……。」

その時

キイーン……

酷い耳鳴りが俺を襲つた。

「つ……。」

思わず頭を抑える。

「紅丞さん?.....どうしたんですか?」

「いや、ちょっと耳鳴りが……。」

数秒後、ようやく耳鳴りが止んだ。

と、同時に、心臓の音が聞こえなくなつた。

「……聴覚が元に戻つたみたいだ。」

「そうですか。……それじゃあ、帰りましょうつか。」

未来は立ち上がつた。……俺も後に続いた。

## 帰り道

「未来、手、繋ぐか。」

急に、紅丞さんからそう言われた。

「……今はほかの生徒もいないみたいですし……良いですよ。」

私は、無防備だった紅丞さんの右手に自分の左手を 俗に言つ、

”カツプル繋ぎ”してやつた。

「え?」これって、カツプル繋ぎ?」

紅丞さんが予想以上に焦っている。

「何焦つてるんですか? 紅丞さんから誘つたんですよ?」

「いや、そうだけど……。」

紅丞さんは恥ずかしがつて俯いてしまった。……なんか可愛い。

「さあ、行きましょうか。」

私たちは家に向けて歩き出した。

「そういえば、紅丞さん。」

「何だ?」

「今、視覚がパワーアップしてるんですよね?」

「ああ……2キロ先の道路標識が見える。」

「視覚がパワーアップするって、視力が上がるだけなんですか?」

「いや、高速で動く物が見えたり、見えちゃいけない物が見えたりする。」

「見えちゃいけない物って、何ですか?」

「それは、アレだよ、その……忘れてくれ。」

「嫌です、教えてください。」

「……。」

「紅丞さん?」

「お、俺は悪くないぞ。視覚が勝手にパワーアップするから……。」

「言ひ訳なんて聞きたくないです。何が見えてるのか教えてください。」

「…………。」

次の瞬間、紅丞さんは私の手を振りほどき、走り出した。

「あつ……紅丞さん、逃げないでください……」

紅丞さんは、男のくせに体力がそんなに無い。……女とはいえ、中學時代は空手を習っていた私に適うはずがなかつた。

私は紅丞さんの腕を掴んだ。

「ほら、捕まえましたよ……！」

「！？……お前速すぎるんだよ……！」

「紅丞さんが遅いんです……わあ、もう逃げられませんよ……」

「頼む！許してくれ……！」

「許す許さないの問題ではなく、言ひ言わないの問題でしょ？……？」

「つ……じゃあ、言わない……！」

子供か、まつたく……でも、私もそろそろ気がつけかもしねれない。  
「はあ……わかりました。」このひとは泣れます……。

「助かつた……あつ……。」

「どうしました？」

「視覚が元に戻った……。」

「てことは、今は普通の状態ってことですか？」

「……いや、触覚と味覚が一気にパワーアップした……。」

「触覚つて、ヤバいじゃないですか。」

「風が身体に当たつて痛い……。」

「大丈夫ですか？……早く帰りましょう。」

「だな……。」

紅丞さんは痛みに耐えながら、足早に帰宅した。

「痛つてえー……。」

紅丞さんは玄関に入るなり、私に寄りかかつて來た。

「だ、大丈夫ですか！？」

「平氣……ただ、足痛い…。」

「それ平氣じやないですよ！！しつかりしてください！！！」

玄関での騒ぎを聞きつけたのか、家の奥からグレイが走つて來た。

「未来ちゃん！紅丞！…どうかしたの！？」

「あつ、グレイ…紅丞さんが…。」

「紅丞、大丈夫？」

「全然…身体中痛すぎる…。」

何で私には”平氣”って言つておいて、グレイには”全然”なのだ  
る…。

「とにかく、一度部屋に運ぶから、グレイ、手伝つて。」

「うん。」

部屋に入り、紅丞さんをベッドに寝かせた。

「痛つ…なあ、もう少し優しくしてくれないか？」

「男なんですから、耐えてくださいよ。」

「でも…痛い…。」

触覚がパワーアップすると、文字通り、触る感覚が鋭くなるので、  
そよ風とか雨とかが痛く感じる…らしい。

以前、いたずらで耳に息をフーッとやった時にはキレられた。…紅  
丞さん、キレイると意外に怖い。

「紅丞、まだ痛む？」

「うん……しばらくなつといてくれ……そのうち元に戻るから……。」「わかつた。」

「紅丞さん、何かあつたら遠慮せずに言つてくださいね？」

「ああ……ありがとう、未来。」

「……じゃあ、私たち、リビングにいるますから、元に戻つたら降りて来てくださいね。」「わかつた……。」「わかつた……。」

私とグレイは部屋を後にした。

「ねえ、グレイ。紅丞さんの事なんだけど……。」「紅丞が、どうかした？」

「あの”五感がパワーアップ”する力、どうにかならないかな？その……操れるようになる、とか。あのままじゃあまりにも紅丞さん可哀そうで……。」

「気持ちはわかるけど、さすがにそれは僕にもカラスにもビハーンもしないよ。紅丞が慣れるようにならないと……。」

「でも、触覚がパワーアップしたり、聴覚がパワーアップしたりすると、さすがに生活に支障がでてしまつし……。」

「うーん……一応、姉ちゃんと相談してみるよ。」「メルに?どうして?」

「姉ちゃんは吸血鬼よりの天使だし、もしかしたら、何か知ってるかもしぬないからね。」「

「ふーん……確かに、グレイとメルさんって、腹違いの姉妹……なんだつけ?」

「うん。姉ちゃんは僕のパパが僕のママに会つ前に会つた吸血鬼の間に生まれた子だからね。」「

今、物凄くわかりずらしい言い方された気がする。」「と、とにかく……メルに聞けば何かわかる?」

「あくまで可能性だけね。」

「わかつた。ありがとう。」

その時 携帯のバイブが鳴った。ディスプレイには知らない電話番号が載っていた。

「……誰だろ?」

出てみた。

「もしもしーし!」

「陸だつた。」

「陸!? あんた、私の電話番号知つてたっけ?」

「いや、あの後、日比野綾子って人を見つけて、聞きました。」「綾子…なんてことを…。」

「未来ちゃん、どちらさま?」

後ろからグレイが声をかける。

私は携帯のマイク部分を抑えながら

「私の従兄弟。…ちょっと待つてね。」

再び携帯を耳にあてる。

「で、陸、何の用?」

「ちょっと聞きたい」とがあつてな。……未来、彼氏いるって本當か?」

「え? あ、まあ一応……綾子から聞いたの?」

「うん。……驚いたよ、まさか未来に彼氏がなあー…未来つて、同性愛者だつたつけ?」

「違う。」

即答しといた。

「え? 違うの? てつきりそつかと…。」

「んなわけないでしょ、女の時の私の彼氏よ。」

「じゃあ、男の時はどうやって接してるんだ?」

「男の時は……女になるまで接してない。」

つていうか、男になつた時は速攻、暁文やグレイに血を分けて女にしてもらつてるから……なんて、陸に言えるわけない。

「てか……あれ？ 確か未来つて、怪我すると性別変わるんだよな？」

「いや、それ、違うみたいで……最近わかつたんだけど、大量出血すると性別が変わるらしいのよ。」

「てことは、いつも大量出血して性別を変えてる……ってことか？ 何のために？」

「何のために……。」

「考えてなかつた……。」

「未来？ もしもし？」

「あ、ごめん、その……何のために變えてるのかは、ちょっとと言えないとかな。」

「ふーん……まあいいや。んじゃ、そろそろ切るぜ。」

「うん、またね、陸。」

「おつづ。」

電話を切り、携帯をしまつ。

「未来ちゃん、従兄弟つて……未来ちゃんの性別の事知つてるの？」

「うん。」

「その人、学校の友達？」

「友達つて言うか……後輩、かな。会つのは5年ぶりなんだ。」

「5年ぶりつてことは、小学校以来、つてこと？」

「そういうことになるね。懐かしいなー……小学生の時はずっと一緒に遊んでたよ、家が近所だつたし。」

「へえ……。」

なぜかグレイがニヤニヤしながらじりじりを見ている。

「……グレイ、何か企んでる？」

「い、いやつ、別に？」

あ、田舎逸らした。

「グレイ？」

軽く睨む。

「いや、その……ただ、従兄弟だったなら、小さじこの、未来ちゃんがどういう子供だったのか知ってるのかなー?とか思つて……。」

「ああー……。」

小さじこの私が。そういうえば一度もそういう話をしたことが無かつた。

まあ、簡単に言つと、小さじこの私は、小学校、中学校と、9年間、立て続けにイジメにあつていた。

ことあるごとに暴力を受け、そのたびに性別を無理矢理変えられてしまう毎日だった気がする。

気がするつていうか……正直な話、辛すぎて無意識のうちに記憶から消去してしまった部分があるので、詳しくは覚えていない。

「……ま、そのうち話すよ。」

「うん。楽しみにしてるね。」

多分、話す事はないだろう。グレイには刺激が強すぎるかもしだれない。こういう約束は自然に忘れてもらつた方がいい。

「未来、帰つたのか?」

玄関の奥の方から暁文が歩いてきた。

「あ、うん、ただいま。」

「おかえり。……今、いいか?」

私は小さく頷き、暁文に近付く。

暁文は私を抱き寄せ、首筋の噛み痕にあわせるように歯を突き刺した。

「痛つ……暁文、グレイがいるんだから、もう少し慎重にやつたほうがいいんじゃない?」

「ん……そうだな。」

暁文は私から離れ、肩を掴み、吸血した。

「……終わったぞ。」

暁文は俺から離れた。

俺はゆっくりとソファに座る。

「なあ、未来。」

「何?」

「出来れば、今度から背伸びしてくれないか?……歯が刺しづらいからさ。」

「解った。でも、それだったら、座つて吸血した方がよくなないか?..」

「まあ、最初はそうだったけど……今は立つたままの方がやりやすいんだ。」

「ふーん……じゃあ、次からは背伸びすればいいんだな?」

「ああ、頼む。」

暁文はそう言いつと、リビングの隅にかけてられている「ヒートを着ると、リビングを出て行こうとした。

「暁文、どこ行くんだ?」

「ちょっと、アルトのところへ。」

「グレイは、一緒にには行かないのか?」

「グレイは……どうする?」

暁文はグレイを見ながら質問した。

「他の吸血鬼のところには行きたくない……。」

「じゃ、未来と一緒にここにいてくれ。多分、夕方には帰ってくるから。」

「うん、気をつけてね。」

「ああ。」

暁文はリビングの扉を開けると、俺たちに背を向けたままひつ囁つた。

「……未来、グレイに変な事するなよ?..」

「したこと無いだろ!..」

素早く反論すると、暁文は逃げるよひて家を出ていった。

「つたく……あの性悪吸血鬼……。」

無意識に、そう呟いた。

「未来ちゃん！ そういうの言ひや黙口だよーーー。」  
ヤバ、聞かれてた。

「じ、ごめんなさい……。」

暁文とグレイは相思相愛の仲だから、互いの悪口を誰かが言つているのはとにかく許せないのだそうな。

謝つても、グレイの瞳は黒いままだった。  
「悪かつたつて……機嫌直してくれよ。」

とりあえず撫でながら謝罪する。

グレイは、吸血鬼とはいえ、天使の血が混ざった吸血鬼。撫でられるのには弱いのか、たちまち瞳がピンク色になっていく。

「もつ……。」

最後には、機嫌を直してくれたようだ。  
すると

ピンポン

家のチャイムが鳴った。とりあえずること。

「はーい。」

玄関に行き、扉を開けると、そこにいたのは

「よー！ 未来！」

陸だった。

## 従兄弟

「…………え？」

俺はつい、その場で硬直してしまった。

「おーい、未来ー？」

陸がわざとらしく俺の眼前で手を振る。

「えつ？ああつ……え？」

……なぜ、ここが解つたのだろう？俺と紅丞さんが同棲している事は綾子しか知らないはず あ、だからか？

「いや、”え？”はこっちの台詞だよ。いつ性別変わったんだ？さつき電話したときは女だったろ？」

そうだった。まずい、話題を変えねば……。

「えつと……綾子に聞いたのか？」

「え？何を？」

「ここを。」

「え？……ああ、うん。”従兄弟なら”って、特別に教えてもらつたんだ。」

綾子の奴……でも、陸なら良いか。

「陸、わかってるとは思うけど、このことは

「わかってるわかってる。これだろ？」

陸は自分の口の前に人差し指を立て、”静かに”のポーズをした。話が早くて助かる。

「……とはいって詳しい場所までは教えてもらつてなくてさ。その

辺歩いてる人に道聞いたやつたよ。」

陸は、少し照れながら答えた。 って、その辺歩いてる人？

「……なあ、陸。」

「ん？」

「その……今言つてた、歩いてる人つて、どういう人だつた？」  
「えつと……かなり長身で、コート着てる、男の人だつた。」  
「……暁文だ。

「そ、そつか……。」

「にしてもさ、その人、目が赤かつたんだよ。それに、天気良いのに、フード被つてたし……これじゃあまるで陸は、俺の目を見ながら、こう言つた。

「 吸血鬼。みたいだよな？」

瞬間、俺は、脳内の隅から隅まで凍り付くような感覚に襲われた。

「……つて、未来？顔真っ青だけど、大丈夫か？」

「えつ？……ああつ、大丈夫、大丈夫……。」

嘘だ。ちつとも大丈夫じゃない。

「な、なあ、陸。どうして、その人が吸血鬼だつて思つたんだ？」

「いや、俺が今読んでるネット小説に出てくる吸血鬼の特徴と似てたからさ。長い八重歯もそうだし。」

「なあんだ。そう言つことか……。」

「未来ちゃん、どちらさまだつたの一？」

ふと、リビングからグレイが歩いてきた。

「あつ。」

そして、陸の姿をとらえた。……どうやらもつ帰つたと思つて出て

きたらしい。

「うわー、未来、あいつ誰! あやめ可憐ことやん!」

「え、あ、いや、その……。」

陸の言葉に、グレイが頬を赤く染めた。

それもしつかせないとマジで可愛いにから。

「し、知り合いの子だよ。……ちよつと待つて。

俺は慌ててケレイをリンクの奥に引っこめた。

「知り合いの子つて……金髪だつたぞ？あの歳で髪染めるのつて、やばくない？」

「か、海外の子なんだよ。

ちょっと苦しい誤魔化し。

「ふうん……まあ、いつか。じゃ、俺、もう帰るわ。」

「ああ、またな、陸。」

「ね、う、んじやなー。」

陸は元気に返事を返し、家を出ていった。

どうしても、解らないことが一つだけある。

俺が、未来の住んでいる家に行く道中に遭つた、あの吸血鬼。そして、未来と話している最中に現れた、あのめちゃめちゃ可愛い吸血鬼。

未来はどういちの吸血鬼のパートナーなんだ？

同じパートナーをやつている身でこんなことを言うのはちょっと酷だが、未来には、吸血鬼のパートナーは合わないとと思う。

……だって、出血で性別が変わるんだぜ？さつきだって、電話した後に会つたらもう男になつてたし……っていうか、その事聞いたら無理矢理話題逸らされたし……

恐らく、電話のすぐ後に血を引いたんだわ。

……不安だ。自分の従姉妹が吸血鬼のパートナーをしている……これほど不安なことはない。

未来と俺は、共に一人っ子。だから、小さい頃は、本当の姉弟のように接していた。もはやそこには、従姉妹なんて壁はなかつた気がする。

だから、不安なのだ。自分の姉の安否が、無性に心配になつてしまふのだ。

……でも、本人は至つて楽しそうだし……それならそれで、良いのかな？

不安を抱えつつ、俺は自分の家の扉を開ける。

”ただいま。”を言う前に、俺は何かに抱きつかれた。

「おかえりっ、陸。」

声の主に、耳元で歓迎される。

「ああ、ただいま。  
  メル。」

俺は、それなりに呆れた声で答えた。

セーフ？

危なかつた……。

暁文の事について訊かれるわ、グレイの姿は見られるわ、男になつたことを問われるわ……災難だつた。

「はあ……。」

俺は意氣消沈のまま、グレイのいるリビングへと戻つた。  
「未来ちゃん……」「めんね。もう帰つたのかと思って……。」

グレイは相当後悔しているようだつた。瞳が青い。

「いや、平気……あいつが、さつき電話で話した従兄弟だよ。」

「ふーん……なんか、大人しそうな人だつたね。」

「そつか？ちびだし、結構やんちゃだぞ？」

昔の話だが、多分今もそつだろ。

「駄目だよ、従兄弟をちびつて言ひちゃあ。……僕も結構気にして  
るんだし。」

「ああ、そうだつたな……」「めん。」

その時

「未来。」

俺の名前を呼びながら、紅丞さんが2階から降りてきた。

「……って、なんだ。男になつてたのか……。」

なぜか、俺の顔を見て、少し残念そうな顔をした。

「別にいいじゃないですか……。」

「まあそうだけど

「紅丞、僕、お腹空いちゃつたよ。」

何か言おうとしていた紅丞さんを止めるように、グレイが血を催促する。

「ああ、解つた。」

紅丞さんはグレイに近付き、その場にしゃがむ  
グレイは紅丞さんに抱き着くようにしがみ付き、吸血を始めた。

「うーん、なんかちょっとジホラシー。……って、何言つてんだ俺。

「…………ありがとう、紅丞。」

「ああ。」

グレイは紅丞さんから離れると、足早に部屋へと戻ってしまった。

「よいしょっ。」

紅丞さんはフランフランしつつ、立ちあがった。

「紅丞さん、大丈夫ですか？」

「ああ、平気。俺、ちょっと部屋で休んでくるわ。」

そう言つと、ゆっくりと階段を上つて部屋へと行つてしまつた。

。

「…………はあ、暇だな……。」

玄関で一人。……じつじつ時は

そりだ、買い物に行こう。

俺は財布と携帯、家の鍵を持ち、マートを着て家を出た。

## アルト

「暖かいなあ……。」

周りに誰もいなく、1人なのをいいことに、未来は独り言を呴きながら桜公園の横の道を歩いていた。手には、コンビニの袋をぶら下げている。

……つていうか、いくら暖かいとはいえ、後ろを歩いている俺に気付いてもいいのではないだろうか？

「未来！」

仕方なく後ろから声をかける。

「つ！？」

未来は物凄く驚いた顔で振り向いた。

「あ……アルトじゃないか！：久しぶりだな、こんなところで何やつてんだ？」

未来は驚きを隠しつつ話しかける。

「……お前、”誰もいない”と思つて独り言を言つたけど、それを俺に聞かれて恥ずかしいから”ちょっと誤魔化そうとしてないか？”

「え、あ、いや、あの……みんなには、内緒にしてくれないか？」

「言われなくてもそうするつもりだ。……つたく、無防備だなお前も。夏子とは大違ひだ。」

「夏子つて……誰だ？」

「ん？……ああ、言つてなかつたか。夏子は俺のパートナーだ、歳は大体お前と同じくらいだな。」

人見知りで人間不信：簡単に言つと、たいして命を狙われてもいいのに、無駄に自分を防衛したがるタイプ……つて感じだな。」

「へえ……でも、確かアルトも、人間嫌いじゃなかつたつけ？」

「ああ、もう慣れた。」

「え、そつなのか？」

「……じゃなかつたら俺は未来に話しかけてないぞ？」

「それもそつか……ところで、アルト。」

「何だ？」

「暁文はどうしたんだ？ わりと、アルトのところへ行って出てつたはずだけだ。」

「ああ、アカツキさんなら、確かにさつき、俺のところに来たよ。軽く世間話した後、すぐメールのところに行つちまつたけどな。」「メールの所に？ そういうえば、メールつてパートナーいるのかな？」

「いるらしいぞ？ だいたい未来よりも2歳年下らしい。」

「ふーん……。」

「……まあ、未来、ちょっと頼んでもいいか？」「なんだよ？」

「俺、今腹減つてんだけど、お前の血、少しでいいから分けてくれないか？」

瞬間、未来はかなり驚いた顔をしていた。

「……は？ 今、なんて？」

「いや、だから、腹減つたから、血、分けてほしいんだけど。」

「ひ……いやいやいや！ 無理に決まってんだろう！ ふざけんな！！」「はあ？ なんでだよ。俺はもう向吸血鬼界こうの世界での権利はとっくに剥奪されてるから多重契約してもいいはずだが？」

「そういう問題じゃねえよ！！ 血が欲しいんならパートナーからも

らえればいいだろー？」「

その言葉に、俺は呆れてため息をついた。

「はああ……解つてねえな、お前も。」

「え……？」

「俺がお前の血を欲しがつてることは、要するに、”性別人間の性別が変わるところが見たい”ってことだろ。解んねえのか？」

「え、いやつ……確かに、俺は吸血鬼界では結構有名みたいだけど、なんでそんな……。」

未来は困惑の表情を浮かべている。どうすればいいのか解らないようだ。

「なあ、いいだろ？ 未来。ちょっとだけ。」

「……。」

未来は戸惑いながら辺りを見渡し

「……ちょっとだけなら。」

了承は得た。

俺は未来に近付き、肩を掴み、口を前に近付け、歯を刺した。

「つ……。」

歯を刺した瞬間、未来の身体が痙攣した。

「……安心しろ、すぐ終わるから。」

「……暁文はいつもそういつて、物凄い速さで吸血していくんだけどな……。」

「だから、安心しろって。俺はそんなことしないから。」

「ほ、本当か？」

「……嘘ついて何の意味があるんだよ。」

呆れながら、血が溢れる噛み痕に吸いついた。

甘い。

吸血鬼の血を飲んだ人間の血は甘いという話だが、未来の場合は人の吸血鬼の血を飲んだから、正直言つとめちゃめちゃ甘い。

何度か吸つてはいるが、未来の身体に変化が現れた。

身体が女性化していく。

身長は変わらないまま、体格や髪型、髪の色さえも変化していく。

「あ……アルトもう、離して……。」

女声で頼まれた。仕方なく離す。

未来から離れ、改めてその姿を見る。

男の時の未来は、髪はショートヘアで黒色、肌も普通で、少し童顔っぽい顔だつた気がする。

それに比べて、女の時は、肌の色は変わらなくとも、髪はセミロングまで伸び、栗のような茶色に染まっていた。顔も少し大人っぽい。

「へえ……流石性別人間。男と女じゃ見た目が違うな。」

「…………そりゃあ、性別が変わるんだから、見た目もそのままじゃないでしょ……。」

未来は呆ながら呟いた。

「？…………その様子だと、口調も変わってるみたいだな。」

「うん。男と女で口調が変わるみたい。性格は同じだけど…………つていうか、私、向こうの世界で噂になってるんだよね？そこら辺は解らなかつたの？」

「ああ、お前はただ”性別が変わる人間”としか言われてないから、詳しいところでは解らないんだ。」

「ふーん…………じゃあ、私、そろそろ行くね？」

「おう、今日はありがとな。」

「うん。それじゃ、また。」

未来は踵を返し、再び歩いて行つた。

噂の性別人間、やはり凄い奴だった。

性別が変わると、いうのも凄い話だが、本人はそのことに一切”嫌”という表情をしていなかつた。

……確かに、吸血鬼界では、未来は”性別が変わる人間”ということと、”正義感が強い”という情報が1番多く広まつてはいるが、それ以外に、”完璧な人間だ”とも言われている。

初め、俺はその意味がよくわからなかつたが、未来に会つて、初めてその意味が分かつた。

性別が変わる事を、受け入れている。

……完璧だな、確かに。

アカツキさんは大丈夫だろうか？

だつて、アカツキさんは完璧というよりむしろ

……やめよう。こんな話はするべきではない。

「……ただいま。」

家にたどり着き、扉を開けて中に入る。

「おかげり、アルト。」

中から、俺のパートナー

夏子が迎え入れてくれた。

夏子も、正直言うと普通の人間ではないのだが……

その話は、また今度でいいか。

## 冤罪

「ただいま。」

玄関の扉を開けて中に入った。

「あつ、未来ちゃん、探したよ?」

グレイがリビングから飛び出してきた。

「え、私を?……ああ、出かけるつて伝えてなかつた……」「みんなさいい。」

「別にいいけど……どう行って來たの? コンビニ?」

「うん。少し買い物に出しひにね。あ、その途中でアルトに会つたよ。」

そう言つた瞬間、グレイの瞳の色が青色になつた。

「え…アルトに?」

「そう、だけど……。」

言わない方がよかつたかな?

「もしかして、血、吸われなかつた?」

「え?…ああ、実はそなんだよね…。」

確かに、さつき男で、今は女…そりやあ吸血されたことを疑つわけだ。

「そつか…アルトに会つたんだ…。」

グレイの表情は落ち込む一方だつた。

…多分、これ以上踏み込んではいけないのだろう。

曉文が入つて來た。

その瞬間、ガチャツと扉が開き

「よつ。」

曉文が入つて來た。

「アカツキー。」

グレイが笑顔で曉文に近付く。

暁文はグレイの頭を撫でながら

「おう、グレイ。未来に何かされなかつたか？」

……だから何もしてないつーの……！

## 不安

その日の夜、部屋でのんびりしていると、紅丞さんが入ってきた。

「未来、ちょっとといいか?」

「なんですか?」

「今日学校で見たあの手紙の事なんだが……。」

「手紙って、あの悪戯の事ですか?」

「実は、あの手紙、悪戯じゃないかも知れないんだ。」

「え?……どういう事ですか?」

とりあえず紅丞さんを部屋に招き、詳しく話を聞くことに。

「……俺、あの手紙を見たときさ、視覚がパワーアップしてたんだよ。」

「確かに、そうでしたね……。」

「その時にわかつたんだけど……あの手紙の字、人の血で書かれてたんだ。」

「えつ!? 人の血、ですか?」

紅丞さんは小さく頷いた。

「……ますます不気味ですね……。」

「ああ。……あの後、何かおかしなことはなかつたか?」

「いえ、特にありませんでした。」

「そうか……もしも、何かあつたら、すぐに俺に言えよ?」

「はい、解りました。」

「……それじゃ。」

そう言つと、紅丞さんは部屋を出て行つてしまつた。

……人間の血……か。

以前、中学の時にイジメを受けていたときは、出血した私の血で教

科書類に悪戯書きされたことはあつたけどなー……他人の血は初めてだ。

人間の血を簡単に入手することができるのは、吸血鬼ぐらいいしかいないだろ?。

手紙を入れた本人が自分の血を使って描いた可能性も無くはないが、それだったら赤いペンキを使ってもいいだろ?。わざわざ自分の血を使って危険を被る必要がどこにある?

紅丞さんは”何かあつたら、すぐ俺に言え”と言つていたが……。軽々と言つて、危険な事に巻き込んでしまつたらと思うと身の毛が立つ。何かあっても絶対言わない。

「はあー……。」

深くため息をつき、ベッドに腰を下ろす。

……中学の時にイジメを受けていた事を少しだけ思い出した。  
些細な事で大きがをして大量出血……大体そこから歯車が狂つたんだよなー……。

ことあることに体育館裏とかに呼び出され、断れば「性別の事を周りに広める。」と脅され、行つたら行つたで暴力受け……

先生に相談しようにも向こうも私から遠ざかり……とにかく居場所が無かつた。

まあ、小学校も似たような感じだつたし、中学で大量出血したときは「ああ、また同じ事されるんだなー。」という印象しかなかつた。

怖くなんかない。イジメはもう慣れた。怖いなんて思つてないはず。

「……寝よっかな。」

考えても仕方がない。何かあつたらあつたで、私には強運があるから Bieber にかなるはずだ。2回も誘拐された経験上そう言える。

私はベッドに潜り、少々早い時間に眠りについた。

不安（後書き）

紅白なう 今年もあと2時間弱！！盛り上がりましてまいりました！！

## 何でもない朝（前書き）

あけましておめでとうございます。今年も1年、「性別人間シリーズ」をよろしくおねがいいたします。

## 何でもない朝

朝。

7時。マンションに住んでいた頃と違い、だいぶ遅い時間に目が覚めた。

…まあ、学校から遠いマンションから、学校に近い紅丞さんの家に移住したから、たいてい遅くても問題ないわけなんだけど。

眠い目を擦りながらリビングの扉を開ける。  
リビングには、案の定誰もいなかつた。

暁文はマンションの方の私の家について、吸血する時のみ、家に来るわけなのだが……  
グレイのためにも、そろそろ暁文にまつわる家の家に来てもらった方がいいだろうか？

いや、でも、私もある意味、無理矢理紅丞さんの家に居候している身なわけだし……どうしようかな……一応紅丞さんに頼んでみようかな？

。 。 。  
悩みつつ、顔を洗い終え、朝食を作るためにキッチンへと向かつた

「ふあああ……。」

7時半。欠伸をしながら、紅丞さんがリビングに入つて來た。

「あ、紅丞さん。おはよっございます。」

「ん……おはよっ。相変わらず早起きだな……。」

「紅丞さんが遅いんです。早く準備しないと遅刻しますよ。」

「はいはい……。」

紅丞さんは逃げるように洗面所へと向かつた。

「未来一、腹減つたー。」

紅丞さんが再びリビングへとやつて來た。

「出来てますよ。」

テーブルの上には既に朝食を並べておいた。メニューは、洋風っぽく、トーストとポテトサラダにしてみた。

「…それにしても、なんで紅丞さんの家って、リビングとキッチン離れてるんですか？リビングにも水道あるのに。」

食器棚はリビングにあるくせに、コンロなどはキッチンにあるので、私はいつも、リビングから食器を持って行き、キッチンで料理を作り、リビングでその食器を洗い、リビングにある棚に戻す……という風にしている。

「それなー、俺も疑問に思つてたんだよ。でも、親が教えてくれなかつた。」

そう言いながら紅丞さんはテーブルの席に座つた。

「あ、それと、あの…ちょっとお願ひがあるんですけど…。」「ん？何？」

「暁文の事なんですけど……グレイのためにも、暁文もこの家に住ませてもよろしいでしょつか？」

「……暁文があ…本人には聞いたのか？」

「いえ、まだなんですけど……。」

「ふーん…グレイと暁文がいについて言つのなら、俺は全然オーケーだよ。多分、親もまだあと数年は帰つてこないだろ？」「」

「本当ですか？ありがとうございます。」

私も朝食を食べるためにテーブルの席に座る。

「あ、紅丞さんまた野菜残してる。」

「いや、これぐらい勘弁してくれよ。」

「駄目です。ちゃんと食べてください。」

「ええ～？」

「嫌なら食べなくていいんですよ?」

「……食べる。」

「それでいいんです。」

紅丞さんは多少ふて腐れながらもサラダに箸を伸ばした。

「まつたく、高校3年生の癖に野菜嫌いなんて……考えられない。

「む……そういえば、未来。」

「何ですか?」

「未来には、苦手なものとかないのか?」

「苦手なものですか?そーですねえ……。」

「そういえば、私の苦手なものってなんだつたつけ?」

「……幽霊とかは?」

「お化け屋敷や心霊スポットには余裕で入れます。」

「虫とかは?」

「高校入学したばかりの頃に飛んでる『キブリ』を素手で捕まえたことがあります。」

「凄つ、三田さんかよ……え、高いところは?」

「通天閣の展望台から街を見下ろしながら、”低いなー”って本音を口ばしたら驚かれたことがあります。」

「お前、前世が鳥がなんかだつたんじゃねえの?……じゃあ、グロテスクなものとかどう?」

「中学校の頃に慣れました。」

「そうか…ふむふむ……。」

「……そんなこと聞いてどうするつもりですか?」

「え?あ、いや、その……な、何でもないよ、忘れてくれ。」

「……まあいいでしょ。ビーセ”私の弱点を聞いて反撃しちよつ”とでも考へてるんでしょ?」

「うひ……。」

あ、今、田え逸らした。つてことは本当か。

「もーちゅつと口クな事考へてくださいよ…受験生なんですから…。」

「わ、解つてるよ…。」

その後、まだ寝ているグレイを放つて、私と紅丞さんは学校へと向かつた。

「ところで、未来。」

「何？」

「……いつになつたら”未来がパートナーをしている吸血鬼”を紹介してくれんのかなー？」

教室へと向かう廊下で、綾子はそう言つた。

……現在、放課後。

部活の勧誘中で、綾子と一緒に1年生の教室を何度も巡回していたのだが、教室に誰かいなかどうかふと気になつたので、我々の教室へと向かう途中。

「そうだなあ……まあ、その日がくれば…ね？」

「やう言つて、いっつもほがらかしてゐじやん…ビーウーフもりい？」

綾子はまじめなく私を睨みながらそう言つた。

暁文の事は、以前綾子に話したことはあるのだが……なかなか会わせる気になれない。

だって、綾子の性格を考えれば、絶対に”吸血してるところが見たい”って言つに決まつてるし、あの無理矢理な吸血を見せるわけにいかないし……。

どうにかして誤魔化すしかない。

「いや、こつちだつて予定が合わないのよ……。」

「本当?……私、そろそろ我慢の限界だよ。近々佐川先輩の家に乗り込んじゃつても恨まないでよ?」

「え、それは困る……。」

「どうしてかな…と悩んでるうちに、教室の前にたどり着いた。

綾子が扉を開けようと手を伸ばした　その時。

ドーン！――

まるで大きな何かを壁にぶつけたかのような、そんな音が教室内から響いた。

その音に、綾子の手が止まつた。

「な……何？今の……」

引きつった表情で「ひらり」と振り返る綾子。

その瞬間

ガラッ！――

今度は勢いよく扉が開いた。

そこにいたのは

赤い目をした

吸血鬼だった。

## 事件

「…？」

綾子が怯んだ瞬間、吸血鬼は腕で綾子の首を軽く絞め、懷からナイフを取り出し、綾子へと向けた。  
まるでの時の、グレイがレリに捕まつたあの時を思い出させるような光景だった。

「綾子っ…！」

綾子は怯えきった表情をしている。

「入れ。」

吸血鬼は私を真っ直ぐ見ながらそう言った。

私はゆっくりと教室の中へ足を踏み入れた。

中を見て、私は驚愕した。

机や椅子は全て教室の後ろの隅に追いやりられ、代わりに黒板の前に  
は、数人の生徒が座っていたのだ。

しかも、その7割が 私と綾子のクラスメイトだった。

2年へと進級するときに、”1年の頃とクラスは変動しない”と聞  
いたので、大体みんなの顔と名前は覚えている。

……でも、何故吸血鬼はこんなことを？

「あやあや。」

綾子と私は、吸血鬼に突き飛ばされるように、その人ごみの中へ押し込まれた。

「……さて、そろそろメンバーもそろつたことだし…。」  
そう言うと、吸血鬼は突如、私の腕を掴み、人ごみの中から引っ張り上げた。

そして

持っていたナイフで、私の腕を

切り裂いた。

一瞬、何が起きたのかわからなかつた。

朝と昼、暁文に吸血されていないせいでも、私の身体には今、血が通常以上に溜まつてゐる。

その血が、腕の傷から容赦なく噴き出す。

「きやああつ！！」

1人の女子生徒が、悲鳴を上げた。

吸血鬼は私を、見下すような目で見てゐる。

意味が解らない。

「あんた…何がしたいの…?」  
「何がって、解らないの…手紙まで出したのに…?」  
「手紙って…?」

思い出した。

昨日の、あの手紙。

田の前に立てる、こいつが、その送り主…。

絶望つて、一体どういう  
？

「いやあ、それにしても、来るタイミング間違えたかなあ。もー少し早く来れば、たくさんの人間を傷つけることができたはずなのに  
なあー。」

吸血鬼は笑いながら答えた。

傷つけられた……そんなこと…。

「……ふざけんなっ……。」

「ん？」

「ふざけたこと言つてんじゃねえ！！！俺以外のつ……俺の友人を傷つけるんなら容赦しねえぞ！！！」

叫んでから、気付いた。

遅すぎたんだ、気付くのが。

性別が変わってる。

しかも、クラスのみんなの前で。

恐れていたことが、現実になつた。

「……ふつ、あはははははは…！…！」

瞬間、吸血鬼は狂ったように笑い出した。

「うじつつ、いきなり男になつた…！…あははははは…！…！」

俺を指さしながら、腹を抱えて笑つている。

よつやく、言葉の意味が分かつた。

絶望

それは、俺の性別が、クラスメイトにばれる」と。

奴の狙いは、それだつたんだ。

「あー…おつかしい。本当に馬鹿だなー最近の人間は…怒るとすぐ周りが見えなくなる。だから面白いんだよなー。」

そして

「……私の名前はメイズ。これでも一端の吸血鬼だ。…それじゃ、安藤未来さん、また会える日までーー。」

やつぱり、その場で小さくジャンプし、姿を消してしまった。

終わった。

何もかも、終わった。

気が付けば、俺は走り出していた。

教室を出て、ひたすら廊下を走った。

その後、どうして家まで帰ったのか

よく覚えていない。

## 絶望

日比野から、”未来の性別が、周りのクラスメイトにバレた”ことを詳しく伝えられた。

性別が周りにバレる　未来が、一番恐れていたことだ。

なるほど……だから、いつまで待つても未来が戻つてこないわけだ。鞄を置いたまま帰るなんておかしいと思つたし。

「佐川先輩、今は早く帰つてあげて下さい。未来、多分家に帰つてると思いますので……。」

真面目な表情をした日比野からそう言われ、俺は自分の鞄と、未来の鞄を持ち、ダッシュで家に帰つた。

「はあ……はあっ……。」

家に帰り、扉を開ける。玄関を見ると、未来の靴があつた。

鞄を持ったまま、2階にある未来の部屋へと向かう。

部屋の前には、グレイがいた。

「紅丞……。」

グレイは、部屋に入ることなく、扉の前で茫然と立ち尽くす状態で俺を見ていた。少し泣きそうな顔をしている。

「グレイ、何があったのか？」

「未来ちゃんがいきなり帰つてきて……何があったのか聞こうとしたんだけど、何も言わずに部屋に入っちゃって……鍵も書けちゃったみたいで、僕、どうすればいいのか……。」

グレイの言葉を聞き、ドアノブを回す。だが、やはり鍵がかかっていた。

俺は咄嗟に財布から10円玉を取り出した。 いつの間にか開くタイプの鍵でよかつた。

10円玉を器用に使い、ゆっくりと鍵を開ける。

「……グレイはここにいる。」

小さく呟き、音を立てない様に部屋に入った。

未来は、部屋にあるベッドの上で膝を抱えてうずくまっていた。ジャージの袖が、まるで刃物で切り裂かれたようになっている。

「……未来。」

小さく呼びかけると、未来は涙で濡れた顔で俺を見上げた。

「…紅丞さん…。」

未来は俺の顔を見るなり、抱き着いてきた。

「…?…ちょっと、未来?」

いきなり抱き着かれ、怯む俺。でも、未来は

「う……ううう……うわああああああっ…………」

泣いていた。未来は、俺にしがみ付ながら、泣いていた。

「未来……」

無意識のうちに、俺も、未来を抱きしめていた。

## 慰め

……「うにうとき、俺はどうすればいいのだろうか。黙つてそばにいるべきか、それとも1人にするべきか……。

考える必要もない。明らかに前者だ。

未来がよつやく少し落ち着いてきた時、俺はとりあえず着替えようと部屋を出ようとした。

だが、ベッドから立ち上がった直後、未来が俺の制服の端を掴み、こつ言つたのだ。

「あのつ……まだ、ここにいてくださいっ！」

驚いた。

正義感が強くて、俺よりも大人なあの未来が、1人になることを拒絶したのだ。

当たり前だ。未来だつて、人間なのだから。

俺は少し、未来を買い被つっていたのかもしれない。

俺はまだすり泣いている未来の横に座りなおした。

「紅丞さん……私、性別の事…みんなに知られちゃって……。」

未来はしゃつくり交じりでそう言った。

「……いよ、日比野から聞いた。話さなくていい。」

「でもつ……。」

「日比野から聞いた情報だけで充分。後は聞こうとしないし、聞こ

うとも思わないから。」

「……わかりました……。」

そう言つと、未来はいきなり俺の肩に身を寄せた。

「あの……紅丞さん、しばらくこうしててもいいですか……？」

「え、あつ……ああ、かまわないよ。」

ヤバい、今、俺の顔、多分物凄く赤くなつてると想つ。

「紅丞さん……。」

未来が眠そうな、ぼんやりとした声で話しかけてきた。

「ん?」

「私、明日から、どうすればいいんでしょ? …?」

そうだ。問題はこれからのことだ。

日比野の話によると、教室にいた生徒は約40名、そのうち7割が未来のクラスメイト、その他3割の中には、3年生もいたらしく。  
……もう今頃、学校中にそのことが知れ渡つっていても不思議じやない。

「……」  
「さうだなあ……あ、そうだ。  
ちょっといいことと思いついた。

「……未来、明日は学校休め。」

「えつ……？」

「俺が明日学校へ行く。そんでもって、日比野から、その後どうなったのか聞いてくるから、それから考えよう。」

悪く言えば、結論を先延ばしにすることになるが、やらなによりはマシだらう。

「紅丞さん……”たまには”いいこと思いつくんですね……」

「”たまには”って……毒舌は健在かよ。」

「ふふつ……でも、そうですね……じゃあ、明日はとにかくお願いします……。」

そつ面うつと、未来は目を閉じ、眠ってしまった。泣き疲れたらしい。

その瞬間

キィイイーン……

酷い耳鳴り。……聴覚がパワーアップする。

「つーー！」

聴覚がパワーアップした瞬間、いきなり轟音が聞こえたりすることがあるから、思わず身構えてしまつた。

すると

トクン、トクン　　といつ、少し小さめの音が聞こえた。

これって……ああ、未来の心臓の音か。そりゃあこんなに近くにいるんだもんな……聞こえるわけだ。

もちろん、それだけじゃなく、スゥスウといつ寝息もハッキリと聞こえる。

……つて、これに聞き入つてる俺つて物凄く変人じゃないか……しつかりしろ、俺。

俺はとりあえず未来を起<sup>ハシナガシ</sup>こなこみひへつとビバド<sup>ヒバド</sup>寝かせ、音を立てないように慎重に部屋を出た。

部屋の前に<sup>ムカシ</sup>は、グレイがいた。どうやら出でへるまで待つたようだ。

「あつ、紅丞。…未来ちゃん、どうしたの?」

「ん、ちよつとな。気にすんな。」

「何で? 気になるよ。」

「いいから。…とりあえず、今はそつとしておけ。」

「……解つた。といひで、紅丞。」

「ん?」

「お腹空いたよ。」

「ああ、そういうえば、朝も昼も吸血してなかつたな……。」

「そうだよ。まつたく…どうして僕を起<sup>ハシナガシ</sup>すに学校に行つひやうかなあ。」

「やつぱり、少し怒つているようだった。…瞳が黒い。」

「悪かったって…でも、起きなかつたグレイも悪いんじやないか?」

「そ、そただけど……。」

「…ま、いいか。ほら。」

俺はその場にしゃがみ、グレイに田線を合わせる。

「そんじや、今日はいっぽい吸血しないとね。」

グレイは俺に抱き着くよ<sup>ハシナガシ</sup>にしがみ付き、勢いよく歯を刺した。

「いつてえ……そんな強く刺さなくたつていいだろ……。」

「ん……めん」「めん。」

軽く謝り、すぐさま吸血した。

数分後、グレイは俺から離れた。

「ふう。……紅丞、大丈夫？」

「いや……大丈夫じゃない……。」

グレイは身体が小さいから、吸うときに時間がかかるてしまう。しかも、今回は朝と昼、および夜の分も血をあげたから、かなり時間がかかつてしまつた。

「……なんか、身体中痛い……。」

「えつ……ごめん、じゃあすぐに部屋に……。」

俺はグレイの手を借りつつ、部屋へと向かった。

## 別の・・・(前書き)

そんなつもり更々ないのになんかBLっぽくなっちゃいました。  
確かに作者はBL好きだけどそんなつもりじゃ

別の・・・

聴覚も元に戻り、少し時間が経った頃

大変なことになった。

未来はまださつきのよつたな状態のままだから、1人にしておいた方がいいのだが

「……じゃあ、俺はどうすればいいんですか?」

暁文がいたことを忘れていた。

しかも、暁文はグレイ同様、朝も昼も吸血していない。もうすぐ夜になりそうだし……一体どうすれば……。

「と、とりあえず、未来が普通の状態に戻るまで待つ、ってことだ……。」

「……紅丞さん、それ、本気で言つてるんですか?」

暁文が俺を睨みながらそう言つた。グレイ? グレイなら俺の後ろであわあわしてるよ。

「でもさ、暁文、未来は今ああいう状態なんだ。もう少し待つてもらわなきゃ困る。……お前だつてわかるだろ?」

「そうですけど……。」

「それでも血が欲しいんなら、俺から吸血するか?」「え?」

暁文が、少し驚いた表情を見せた。

「……でも、俺、未来と契約してるから、未来の血しか飲めないですし……。」

「それはあくまで権利剥奪前の話だろ?……今は別なはずだ。違うか?」「そうですね……。」

暁文はまだ口「」もつてゐるようだつた。

「ちょ、ちょっと待つて、紅丞。」

後ろからグレイが声をかけてきた。

「なんだよ、グレイ。」

「いや、その……アカツキは、結構グルメなんだ。だから、未来ちゃんの血じゃないと満足できないんだよ。」

え、そうなのか……。

「……じゃあ、やっぱり我慢してもいいつか……。」

「……いや、紅丞さんがいって言つんなら、紅丞さんの血も飲みますけど……。」

その言葉に、グレイが反応した。

「え？……いいの？アカツキ。」

「ああ。紅丞さんも、グレイの血を飲んだことがあるんだろう？」

「そうだけど……。」

言葉を濁すグレイ。

「ちょ、ちょっと待つてくれ。」

今度は俺が間に入つた。

「何？紅丞。」

「その……俺は確かにグレイの血を飲んだことあるけど、それがどうかしたのか？」

「えっと……紅丞には話してなかつたんだけど……吸血鬼の血を飲んだことがある人間は、体内の血が甘くなるんだ。」

「……なんとかは僕もわかんないんだけどね。で、アカツキはそれが好きなんだよ。そうだよね、アカツキ？」

グレイの言葉に、暁文は頷いた。

「てことは、暁文は、俺の血でも充分飲める……ってことか？」

「そうなりますね。」

暁文はそう言つと、俺に近付いてきた。

「そうとわかれば話は別です。……今、いいですか？」

「ああ、解った……グレイ、後ろ向いて。」

「え？ なんで？」

「何でつて……察しろよ。」

暁文はいつも未来に抱き着くように吸血している。そうともなれば……解るだろ？

「？ 解つた。」

グレイは”？”を浮かべながら後ろを向いた。

「……じゃ、失礼します。」

暁文は俺に抱き着き、噛み痕に歯を突き刺した。

グレイよりも歯が長い所為か、めちゃくちゃ痛い。

暁文はそのまま歯を抜き、吸いついた。

「うつ……ー？」

「何だつ……！」れ！？

グレイとは全然違　いや、そりや、そもそも身体の大きさが違うから、全然違うのは当たり前なんだが……。

暁文は、まるで俺の身体から血を絞り出すかのように、抱く力を強くし、且つ、尋常じやないスピードで血を吸い上げている。吸い上げる度たびに心臓が半端ない速度で鼓動を繰り返しているのがわかる。

……っていうか、未来は、いつもこれに耐えて来た……って事だよな？

「はあ……はあ……。」

息をするのも辛つらくなり、暁文の服にしがみ付く。

苦しい。

ただ純粋に、そう思った。

瞬間、暁文が俺を離した。

「あつ……。」

支えが無くなり、俺はその場に倒れる。

その音に、さすがのグレイも振り向いた。

「！？……紅丞！！」

グレイは慌てて俺に駆け寄る。

「紅丞さん！大丈夫ですか！？」

暁文も慌てて俺に近寄る。

「……あ、暁文…お前、いつもああなのか…？」

「え…そうんですけど……。」

あれがいつも通りなのか……だつたらやつぱり、安藤未来はただ者じゃないな。

「紅丞、大丈夫？」

「大丈夫じゃない……悪いけど、俺を部屋まで運んでくれないか…？」

そう言つた瞬間、暁文がいつも未来にやつていたように、俺を”お

姫様抱っこ”で運び出した。

……いや、男なのにお姫様抱っこってなあ…恥ずかしすぎるだろ。暁文は俺を抱えたまま、器用に扉を開け、俺を部屋へと運んだ。

「よこしょひ、と……。」

暁文はゆっくりと俺をベッドに降りした。

「ありがとな、暁文、……。」

「いえ、俺の方こそ、ちょっと無理させひやつてすいませんでした。」

「……それでは、失礼します。」

暁文は軽く会釈すると、部屋を出て行った

。

## 訪問（龍書丸）

かよつと紅丞と未来だけで引っ張りすがれてる感じがするんで、ちや  
つちやと次行つちやいます。

翌日の朝。

私は、クラスメイトの1人を連れて、ある家の前に来ていた。  
……佐川紅丞の家。そして、安藤未来が住んでいる場所。

今や、未来が佐川先輩の家に居候していることを知るのは、私と、  
私が連れてきたクラスメイトぐらいだろうな。と思う。

「……行くよ。」

「え、本当に行くんですか？」

「当たり前じゃん。そのためにわざわざここまで来たんだから。」

「でも……安藤さん、断つてくるかも……。」

「そりやあ断つてくるに決まってるじゃん。でも、そこを説得する  
のが私たちの役目なの。……さ、行くよ、夏子！」

私は夏子と共に、勢いよくインターフォンを鳴らした。

## 訪問 その2

ピンポーン

朝、紅丞さんが学校へ行つた後、家のチャイムが鳴つた。

俺は、ちよつといさりも、暁文に血を引きて性別が変わり、男になつた状態で出た。

扉を開けると、そこにいたのは 綾子。

そして、1人の女子が、綾子の隣に立つっていた。

「…………は？」

俺は変な声をあげてしまつた。

「未来、おはようーー！」

綾子は右手を挙げて挨拶した。

「え、あ、いや…………おはようーー？」

意味が解らなかつた。

「……なんで、綾子がここに……いや、それならまだしも、隣にいる女子は誰だ？」

「……っていうか、綾子、何の用だよ？ 今日学校だろ？」

「うん、そうだよ。だから未来も、学校行こりよー！」

「……なるほど、さすがは綾子。俺が休むと思つてきたらしい。いや、間違つてはいなんだけどな。」

「嫌だ。」

俺がそう言つと、綾子は少し大きめのボストンバックを俺に差し出した。

「……何、これ。」

「何つて、男子用の制服。」

「……は？」

「だーかーらー！ 学校行こりよつて言つてんのー！」

「……ふざけんな。綾子も見てただろ？ 昨日の様子……俺、行かないから。綾子たちも早く学校行けよ、遅刻したくなけりやな。」

綾子を軽く睨み、扉を閉めようとした が、

「ふざけてんのはあんたの方でしょーーー！」

綾子がそう叫びながら扉に手を挟んできた。

「つ……何だよ、いい加減にしてくれーー！ 大体俺のどこがふざけてるつて言つんだよーー！」

再び扉を開け、綾子に向けて怒鳴った。

「あなたの今やうのとじてのことがふざけてるって言いたいのよー！」

綾子は怒鳴りながら俺の胸倉を掴んできた。

「……大体さあ、他人には平氣で説教がましてる癖に、自分の事となれば別つて、おかしくない!? 变だと思わない!!?」

「それは……普段の奴とは格が違うんだよーー俺の性別が、みんなに知られて……もう、俺……」

最後の方は声が小さくなり、俯いてしまった。

綾子は俺から一度手を離し、代わりに俺の肩に手を載せた。

「未来、そのままでいいから聞いて。未来さあ、私に性別の事がバレた時、何て言った？」

「……あなたは確か、”お願いだから、このことは誰にも言わずに、内緒にしてほしい”って言つたよね？」

で、私は、それを今まで誰にも言わず内緒にしてきた……これ、何を意味するか分かる？」

「……わからない。」

「私はこの町出身、でも未来は違う。…で、私は未来の性別の事を受け入れた。

……ちょっと的外れな言い方になるかもしれないんだけど、私たちのクラスメイトはみんな、この町の出身だから、未来の性別を受け入れてくれると思うの。

だつて、私も、受け入れることができたんだし……違う?」

「それは……確かに的外れな言い方だな。」

「うつ……そこはいいでしょ……だから、ね？……この町の人たち、信用してみよっよ？」

「でも……。」

「……もう、そんな狼狽えちゃって……未来らしくない……何かあったら私が守つてあげるから……！」

「綾子……。」

ヤバい、ちょっと泣きそう。

「解つた。俺、綾子を信じる。……でも、その前に二つ、訊いてもいいか？」

「何？」「

「男のままじゃないとダメか？」

「いや、の方でもいいけど……なれるの？女に。」

いや、これ、男でも女でも変わらないかも知れない。

「……じゃあ、男のままでもいいや。せっかく制服も買つてくれたみたいだし。」

「うん。制服、結構高かったんだよ？」

「それは、悪かったな……じゃ、もう一つ。」

「何？」

「その……そいつ、誰だ？」

俺は綾子の隣に立つている女子に目を向けた。

「誰つて……1年の時も同じクラスだったんだよ？」

「そうだっけ？……なんか、顔は見たことがあるんだけど……。」

「もー、未来い、冗談キツイよ？1年の時も同じクラスだった夏子を忘れちゃうなんて。」

「ん？夏子？……どこかで聞いたことあるようなあ。

「夏子って、もしかして……。」

俺は確かめるように、女子の方を見る。

女子はゆっくりと俺に近付き、小声で

「あの、アルトから、何か聞いてませんか？」

そう言った。

「忘れていいようなので、自己紹介させていただきます……えっと、赤崎夏子と申します。よろしくおねがいします。」

女子 夏子は、笑顔で自己紹介した後、深々とお礼をした。

「あ、ああ……よろしく。」

俺はぎこちなく挨拶をした。

「ねつ、未来。凄いでしょ~」の子、めちゃくちゃ礼儀正しいんだよ?」

「いや、まあ……綾子とは正反対だなーと思つた。」

「え、何それ。私礼儀正しくないみたいんじやん。」

「いや、礼儀正しくないだろ、綾子は。」

「えー! ? 何それ酷い! !」

俺は「はいはい」と生返事を返しながらボストンバッグを受け取つた。

「着替えたら呼んでねー。」

「はーい。」

俺は、綾子と夏子をその場に残し、扉を閉めた。

……綾子は、俺の事を心配してわざわざ工房まで来てくれたんだ俺はそれに、応えないといけないんだ。

俺はとりあえず自分の部屋へと戻り、男子用の制服に着替えた。

予想外

おお～～！

「……え？」

「安藤……お前やつぱり学校来たんだな……」

「え、あ、ああ……。」

思わず拍子抜け。中学の時は全然反応が違う。  
俺の反応を後日に、周りの奴らは日々に『やっぱ安藤は男の方がか

とか（余計なお世話だ。）言つてゐる。

俺は一度、綾子に、”中学時代に性別がバレた時の事”を離したことがある。

そのころの話は、さすがに自分でも忘れてしまったのだが、クラスメイトの反応は、それとは全然違う反応だった。

これは……既、俺の性別を受け入れてくれる……とこつべきなのだらうか？

まだ、少し信用できない。今日一日で様子を見ないと無理かもしない。

とつあえず、自分の席に座る。

「…………」

時間がとても長く感じる。早くホームルームになつてほしい。

そう思つた瞬間

「安藤……」

クラスの、比較的チャラい男子、須藤が話しかけてきた。思わず、ビクッと身体が竦んでしまう。

「え、な…何？」

怖がる表情が、表に出てしまつた。

「…なんか、違うなあ。」

須藤がそう呟いた。

「…………え？」

「いや、だから、普段の安藤と違つて言いたいんだよ。…なんていうか、女の時はもつと強気だったはずだろ？」

「そ、それは……。」

「もつと堂々としてるよ。俺たちは別に、その性別の事、嫌だとは思つてないから。」

「え……本当か？」

「ああ。逆に、なんか、男友達ができたみたいで、少し嬉しいよ。」

須藤は確かにチャラいが、嘘はつけないタイプだ。……てことは、本當か。

「…………ね？ 言つたでしょ？」

隣の席の綾子が横から声をかけてきた。

「確かに、このクラスの人たちは、俺の中学時代のクラスメイトとは違うようだった。

「……なんか、ありがとな。」

「いいつていいつて……！ 気にすんなつ……それよりも……。」

須藤が少し恥ずかしそうに切り出した。

「…………数学のノート貸してくんない？ 昨日、書き忘れちやつて。」

「つたく……いつも授業中寝てるからだろ？ ほひ。」

俺は素直に数学のノートを差し出した。

「ありがとな、安藤！ ホームルームが終わる頃に返すからー。」

そう言いながら、須藤は自分の席に戻つて行つた。

## 予想外（後書き）

すんません。なんか、正月なもんで、夜更かしあまくつてたら寝不足が原因でこんな出来になりました。どじをどじ修正したらいいのかわからなくなってきた~~~~~

とりあえず、今後ちゃんと修正できるように、早寝早起き（多分無理だけど）を心がけ、宿題も（答えを見ながら）ちゃんとちゃんと雪かきも（嫌々）しつつ頑張りたいと思います。

## 帰路

「綾子……。」

「ん? 何?」

「なんか、今日、ありがとな。」

「へつ? ……な、何言つてんの! ——今日は私のおかげじゃなくて、あの……頑張ったのは未来じゃん!」

綾子を見ると、顔を真っ赤にしてあわあわしている。

「…………そりゃあ、確かに俺、綾子にそんなお礼の言葉述べたことないのかもしぬないけどさ……普通そんな慌てるか?」

現在、地下鉄構内。綾子を家までおくるために2人、帰路についていた。

「い、いやあ、普段お礼言わない人からお礼言われるとうれしあわわするもんだよ?」

「ふーん……とにかくでさ、綾子。」

「何つ?」

「夏子の事なんだけど……。」

「ん、夏子がどうかしたの?」

「いや、その……いつ、仲良くなつたんだ?」

「えつとね、昨日の放課後、すぐ。」

「すぐつて……俺が教室出た後?」

「そう。」

「…………どう風に?」

「そこは企業秘密。」

「何で企業秘密なんだ。」

「でさ、未来。」

「ん?」

「昨日の吸血鬼の事なんだけど…あれ、未来の知り合い?」

「まさか…あんな奴初めて見た。」

「そつなの?……じゃあなんで未来を襲つたりしたのかな?」

「さあな…吸血鬼の考えることはわけ解かないからな。」

暁文もそうだし。

「…吸血鬼と言えば、未来。」

「今度はなんだ?」

「その……未来がパートナーをしてこる吸血鬼はいつ出でくるわけ?」

「ま、またその話か…だから、その日が来れば、な?」

「えー?」

「つたく……グレイを見る事ができただけでいいと思つてくれ。」

「だつて、グレイちゃんは佐川先輩のパートナーなんでしょ?私が見たいのは未来がパートナーしてる吸血鬼だよ。」

「でもなあ……。」

紅丞さんで思い出したのだが、念のために言つておくと、今朝、学校を出る前に紅丞さんに”やつぱり学校に行くことになつた”と連絡を入れたら

「無理しないで、何があつたらすぐ言えよ?あ、それと、無理だったら部活は来なくていいから。」

と言つてくれたおかげで、少し楽に登校することができた。……学校では会えなかつたから言えなかつたけど、帰つたらちゃんとお礼言つておかなきゃな…ちなみに、部活は休んだ。

「もー今日は我慢ならんよー。家までついていく。」

「え、ここから?…道戻ることになるけど?」

「構わない!…もうこうなりやつていいくよー!」

一応、綾子の中では、暁文も紅丞さんの家にいるところになつてこるらしい。……本当はマンションの方の家にいるんだけどな。

「はあ……悪いけど、無理。会わせることはできない。」「え、なんで？」

「だつて、相手は吸血鬼なんだぞ？お前絶対”吸血すると”が見たい”とか言うに決まってるんだろ。」「？…そんなこと言わないよ？」

「え？」

「私はただ、”未来がパートナーをしている吸血鬼が見たい”ってだけで、”吸血するところが見たい”なんて思わないよ。それに、吸血シーンってさ……結構エグいイメージあるし…それなら見たくないし。」

なんと、綾子の口からそんな言葉が出るとは……いつもの好奇心旺盛な綾子はどこ行つたんだ？

ちょっと、綾子の事を誤解していたかもしねない。

「と、言うわけで、未来。いいでしょ？」

「まあそれなりいけど……でも、もう少しだけ待つてくれないか？」

「えー？なんでー？」

「今その吸血鬼、マンションの方の俺の家にいるんだけどさ、近々紅丞先輩の家に移住するかもしれないんだ。そういうのが終わったらにしてほしくて。」

「ふーん……じゃあ仕方ないか。」

「ああ、悪いな。」

「大丈夫！…それじゃ、私この辺でー。」

「おう、また明日。」

「また明日ー！」

綾子は元気に地下鉄構内を走つて行つた。

## 移住

「 っていうわけなんだけど…… ビリ、思ひ?」

現在、マンションの方の自宅。

とりあえず暁文に移住の話を直接しようと思い、綾子と別れたすぐ後、紅丞さんの家には帰らずまっすぐマンションに行つた。ゆつくり話をしようと思つたらいきなり取り押さえられて服を無理矢理脱がされ（念のために言つておくと、ブレザーだけ）、抱きしめられた挙句吸血されたので、仕方なく吸血されながら話を進めることにした。

「ん…… そうだな……。」

暁文は私を抱きしめたまま悩んでいるようだつた。

「確かに、いちいち外に出るのも面倒だつたし、グレイと一緒にいられるんならその方がいいけど…… 紅丞さんに了承は得たのか？」

「それは大丈夫。今朝OKもらつたから。…… つていうか、離してくれない？」

「あ、ごめん。」

暁文から解放された私は、すぐ寝室へと向かつた。  
さすがに男子の制服で家まで帰るわけにはいかない。…… こういう時のために、外行き用の服を何着か残しておいて正解だつた。

着替え終え、寝室から出ると、暁文が少々困ったような顔でソファに腰かけていた。

「暁文? どうかした?」

「いや…… 僕が移住したら、この部屋どうするんだ?」

「あー……そこら辺は大丈夫。」

以前、私が紅丞さんの家に行く時に、いちいち帰つてくる必要の無い様に、冷蔵庫の中は空カラにして、電化製品も一応必要最低限のもの以外はコンセントは抜いてある。

……ので、暁文が移住しても、たいして変化はない。

「でも、もしかしたら親が帰つてくる」とがあるかもしれないから、一応部屋は売り扱わないでおぐ。」

「ふーん……それならいいか。俺、今すぐ移住できるけど、いいか？」

「あ、大丈夫。それじゃ、行こつか。」

私はブレザーを鞄に突っ込み、暁文はコートを着て家を出た。

「……そういえば、未来。」

「何？」

「さつき血を吸つた時に思つたんだが……お前、他の吸血鬼と契約したのか？」

「え？」

その言葉に、つい、足が止まってしまった。

「…未来?…どうした?」

暁文も立ち止まり、じらじらを向く。

「え、あ、いや、その……なんで解つたの?」

「なんでつて……詳しい部分は省くけど、吸血鬼の唾液には血を増やす作用がある…って言つたよな?」

で、さつき血を吸つた時に、なんとなく量が多い気がしたんだ。：

昨日吸つてないつてのもあるけどな。」

「あ、確かに昨日、吸血してない……じゃあ暁文は昨日一日何も口にしなかつたつてこと?」

「いや、紅丞さんから吸血した。」

「え!?」

て、ことは……昨日紅丞さんは、暁文の吸血を身をもつて体験した

……つてことになるよね?

……帰つたらとりあえず謝つておかなくちゃ…。

「…で?未来。誰と契約したんだ?俺の知らない所で契約するなんてあんまりじやないのか?」

「別に、誰と契約しようが私の勝手でしょ?」

「やう言つわけにはいかないんだよ。」

「……どうして?」

「さつき、吸血鬼の唾液には血を増やす作用があるって言ったよな？以前その話をした時に、未来は”血を吸わせてそのまま放置したら、身体中の血が増えまくって大変なことに……ってのは有るのか？”って訊いたよな？」

「あ……うん、血が増える上限とかあるのかなーとか思つて……。」

「っていうか、男の時の私の物真似上手いな……こいつ。

「その時は解らなかつたんだけど、俺も気になつたから、一昨日、おとといアルトとメルのところに行つて訊いてきたんだ。」

「そうだつたの？」

「ああ。……で、その結果 血が増える上限は無いらしい。」

「上限は、無い？……ことは？」

「血が増えまくつて大変な事に、は有り得る、ってことだ。」

そう言つと、暁文は立ち止り、私の肩を掴んで自分と対面させた。

「つまり、未来は既に俺とグレイ、2人と契約している。……そんな状態で3人目の吸血鬼と契約したらどうなるか、解るよな？」

暁文は、物凄く真剣な目で私を見つめていた。

怖い。

暁文はただ、教えてもらつたことを話しているだけ。なのに、物凄く怖い。

「…………めんなさい。黙つてて、ごめんなさい……。」

俯き、まるで瀬夏のような泣きそうな声で、私は必死に謝罪の言葉を述べた。

……だが、返つて来た言葉は驚くべきものだった。

「え、何で謝るんだ？俺、むしろ嬉しいと思つてるやつ？」

は？

「……なんで嬉しいの？」

顔をあげ、暁文に問う。

「……だって、血が増えるってことば、血を飲める量が増えるって事だろ？」

しかも、たくさん血を飲んでも、未来が貧血で倒れることが無い、  
って事だろ？……いいじゃ ないか、それだったら。」

「え、あ、いや……見方を変えればそつなるけど……もつといいや。」

暁文の手を振りほどき、歩き出す。

「……未来？怒つてんのか？」

後ろから暁文が追いかけながら訊いてきた。

「別に、怒つてなんかない。」

目を合わせず答える。

「何怒つてんだよー、俺なんかまざいこと言つたか？」

「五月蠅い！もうほつといて！！」

「なつ……怒鳴ることないだろ……。」

暁文は少し不機嫌になりつつ、私の横についた。

「……で、答えてくれ、誰と契約したんだ？」

「……アルトと。」

「え、アルトと契約したのか？」

「ただけど？」

「へえー……あいつが……そりゃそつか……」

何やら一人で納得している。

「何一人で納得してんのよ、私にも説明しなさいよ。」

「ん? ああ、アルトはな、結構前から未来の性別に興味を持つてたみたいなんだ。」

「私の? ……そういえば、”性別人間の性別が変わるところが見たい”とかなんとか言っていた気がする。」

何度も会話を交わしていると、紅丞さんの家がある付近にたどり着いた。

「……それにしても、何回も往復してるけど、どうして未来の家と紅丞さんの家はこつも遠いんだ?」

「そんなの知らないよ。暁文が地下鉄乗れるようになれば全て丸く収まるのに……。」

「そんなこと言つたって、俺日本円持つてねえよ。吸血鬼の通貨も一昨日使い果たしたし。」

「え、そんなのあるの?」

「ああ。通貨単位の読み方はは日本と同じエンなんだけど、吸血鬼にしか使えないんだ。……実物があれば見せてやりたいんだがな……。」

「ちなみに、一昨日、どこで、何に使つたの? そのお金。」

「メルのところで、これを買うために使つた。」

そう言いながら暁文は、吸血道具を取り出した。

「え、吸血道具? メルが持つてたの?」

「ああ。吸血道具は、身体的、もしくは精神的にハンデを持った吸血鬼へ、王から支給されるものなんだ。で、一昨日、メルが、”もうパートナーがいるから、出来ることな

ら買つてほしい”って言われてな……まあこの世界じゃ吸血鬼の金なんて使えないから、有り金全部と交換したんだ。

「……大丈夫なの？そんなことして…また使うかもしれないのに。」

「大丈夫。どーせ吸血鬼界でも、血を買う時ぐらいにしか使わなかつたし。それに

今は、未来がいるからな。」

暁文は、私を見下ろし、微笑みながらそう言った。

「……あんたはいつも強欲なんだね。」

少し呆れてしまった。

その時。

「未来くーん！…！」

聞きなれた声が、後ろから聞こえた。

後ろから聞こえた声に、俺と未来は振り向いた。

そこにいたのは　。

以前、未来の家に来た友人、日比野綾子だった。

「あ、綾子！？」

未来がすごく驚いている。

「『ごめん、暁文、ちょっと待つて！』

小声で俺に声をかけると、未来はさつさと綾子の方へ走つて行つてしまつた。

……遠くの方で何か話している。

や一つぱり、あの綾子って女からは妙な気配がする。

なんというか……吸血鬼や天使とは違う、何か別の……”巨大な力み  
たいな何か”があの女にはあるような気がする。

初対面の時は何事もなく、ただ、変な気配がするだけ思つたのだが、今は違つ。

気配の力が強まつてゐる気がする。

なんとなぐ、近寄りたくない。

「暁文ー！ちょっと来てーーー！」  
遠くで未来が手を振つてゐる。  
仕方なく近寄る。

「あ、綾子…紹介するね？…朝比奈暁文、私がパートナーをやつてる吸血鬼だよ。」  
未来はぎこちなく、綾子に俺を紹介した。  
「暁文君で、まさかあの…？」  
「そう、以前、綾子もあつたことあるとゆづよ？…あの時は姿が違つたけど。」  
確かに、初めて綾子に会つた時、俺は子供の姿だつた。

「てことは…同一人物！？」  
「うん……そういうこと…。」

未来は綾子に、”吸血鬼は年齢を変えることができる”事を説明した。

「へえーーーー凄いじゃんーーーー！」

綾子は目を輝かせながら俺を見ている。正直、あんまり得意とするタイプじゃないな…。

「…それにしても、吸血鬼ってやっぱり目が赤いんだね…グレイちゃんの時は天使だから赤いのかと思ってたけど…。」

え、今、なんて？

「あ、天使は普通は瞳の色は黒なんだよ。」  
未来が慌てて補足している。

「未来、ちょっと待て。」

俺は素早く止めに入った。

「何？」

「グレイに、会わせたのか？」

「会わせたっていうか…偶然会つちゃったんだよ。そりだよね？綾子。」

「うん。」

……なるほどなあー…ことせ、グレイは俺に”綾子と会っていたことを話してない”…といふわけか…これ、どう落とし前つてくれるんだろうな。あの天使。

「……解った。未来、俺、先に紅丞さんの家に行ってるから。」  
俺は踵を返して歩き出した。

「あ、待つて、私も……じゃあ綾子、また明日ね。」

「うん、また明日。」

後ろからそんな会話が聞こえ、未来が俺の横につく。

「暁文、どうかしたの? いきなり……。」

「なんでもない。ちょっと急ぎたくなつただけだ。」

歩く速度を速め、俺たちはせっさと紅丞さんの家に向かった

。

「紅丞さん、ただいま帰りましたー。」

時間にして、6時前後。ちょっと夕方気味な時間。私と暁文は紅丞さんの家にたどり着いた。

「お、来たか。」

「紅丞さん、今日からよろしくお願ひします。」  
暁文が律儀に礼をする。

「アカツキー。」

少し待つて、グレイが2階から降りてきた。  
目の色が変わった。

グレイが暁文に飛びつこうと、暁文の前に立つた、その瞬間

途端に、暁文の

バシッ

とでも音がしそうなくらいの勢いで、暁文がグレイに、めちゃくちゃ痛そうな『コロピン』をかました。

「ひゃんっーー！」

グレイは変な声を出しながら尻餅をついた。

「なつ……何！？」

「何じやねえよ。綾子の事黙つてたな？」

「そ、それは、その」

グレイが何かを言おうとしているが、暁文はそれを遮るように紅丞さんを見た。

「紅丞さん、俺、ちょっとその辺散歩してきますんで、部屋の準備とかよろしくお願ひします。」

「そりゃうそりと家を出て行ってしまった。」

「あ、嫌つ、待つて、アカツキー！！」

グレイは半泣き状態で家を飛び出した。

「……はあ……。」

ため息　　しか出ないな……。

「な、何かあつたのか？」

「……ここに来る前に、綾子に会つたんです。」

「田比野に？」

「はい。……以前、グレイは綾子に会つたことがあるんですけど、そのことを暁文に話してなかつたみたいで……それで。」

「え、暁文はそれだけでああなるのか？」

「なんと言いますか……本当にグレイの事が好きみたいで、隠し事をされるのが嫌みたいなんです。」

カラスの時もそうだつたし。

「へえ……そうなのか。」

「そりゃうそりと家を出て行ってしまった。」

「それもそうだな。じゃ、戻つてくる前に部屋の準備しておくか。」

「未来、手伝ってくれるか？」「

「もちろん。」

私は紅丞さんの手伝いをするため、2階へ移動した。

## トラン（後書き）

束縛してこむといわを見るのは嫌いじゃないです。

## 言い訳

アカツキの後を追つて家を飛び出したはいもの、何を言おうか……。

「あ、アカツキ、ちょっと待つて……」

早歩きで僕の前を歩くアカツキに向かって、コートの裾を掴んで引き留める。

「なんだよ？」

アカツキが振り返り、軽く睨むように僕を見下す。その目に、思わず身体が竦んでしまう。

「いや、あの、その……。」

「……用がないなら離してくれ。」

「……。」

ぶんぶんと首を振つて拒否する。

「違うの……綾子ちゃんのことば、その……未来ちゃんが話すと思つたの……。」

「……そうなのか？」

その言葉に、しつかりと頷く。

「だから、誤解なの……。」

途端に、僕の目から涙が零れた。

「つ……。」

隠すために、俯ぐ。

「……はあ……お前は泣いてばっかだな……。」  
アカツキが呆れたように呟く。

「泣かせるのは、アカツキでしょう……。」  
「いから、顔上げる。」

「……嫌だつ……」「

俯いたまま顔を背ける。

「しかも意地つ張りと来たもんだ……大変な彼女だな。」

アカツキはそう言いながら僕に田線を合わせるようにしゃがむと、突如、僕の顔を両手で持ち上げると

唇に、キスをした。

「んっ…………？」

本つつつ當に驚いた。約半年ぶりのキス。

数秒後、アカツキは僕を離した。

「あつ…………。」

言葉がでない。アカツキはさつきとは違い、優しそうな目で僕を見ていた。

「……俺さ、グレイに隠し事されるのが嫌で……だから、誤解ならそれでよかった。安心したよ。」

「ほ…………本当…………？」

「ああ。……俺もさ、話聞かずに出で行つたりして、『ごめんな。』

そつ言いながら、アカツキは僕の頭を撫でた。

「ううん、解つてくれて、嬉しいよ。……それじゃ、帰ろつか？』

「そうだな。」

「

アカツキは立ち上がり、僕の手を引きながら家まで歩いた。

## 片付け

「……と、こんなもんだな。」

「結構片付きましたね。」

今、私と紅丞さんは、グレイが使つてゐる空き部屋にいる。

紅丞さんの家は、確かに大きいのだが、部屋数も多く、紅丞さん本人の部屋と、ご両親の部屋。そして、来客用の部屋と、何故かは知らないが空き部屋が1つだけある。

「……思つたんですけど、この部屋、誰の部屋なんですか？」

「ん？……弟の。」

「え！？ 紅丞さん、弟がいたんですか！？」

「そうだけど……言つてなかつたつけ？」

「聞いてませんよ……初耳です。」

「そつか……だつたらごめん。黙つてて……」

「大丈夫ですけど……何歳年下なんですか？」

「年下つて言うか……双子なんだ。」

「そうなんですか？……てことは、同じ高3？」

「そう。向こうは全寮制の高校に通つてゐるんだ。」

「へえ……意外です。紅丞さんに弟がいたなんて。双子つてことは、顔も似てるんですね？」

「うーん……中学の奴らに結構似てるって言われたけど、今はどつなんだろ……3年間会つてないから解らない。」

その時。

「ただいま。」

玄関からグレイの声が聞こえた。

「帰ってきたみたいだな。」

私と紅丞さんは部屋を出て階段を下りて行った。

「「おお……。」」

部屋についた瞬間、グレイと暁文は小さく歓声を上げた。

とりあえず、元々紅丞さんの弟さんの部屋なので、その半分をグレイの部屋用に改造（つていうか模様替え）しただけだったのを、全体を模様替えさせていただいた。

「ほんと未来に助けてもらつたんだぜ。」

紅丞さんは笑顔でそう言った。

……紅丞さん本当に体力無いから、テーブルも1人じゃ持てなかつたみたいで……情けない。

私？私は……まあ、箪笥は1人で持てた。中身詰まつてたけど。

「まさかこんな風にしていただけなんて…ありがとうございます。」

暁文は丁寧にお辞儀をした。……つていうか、それとも本気で気になつて来た。

「…ねえ、暁文。」

「ん?」

「何で、紅丞さんには敬語なの? 暁文よりも年下なの!」。

「あ、それ、俺も気になつてた。」

紅丞さんが続けて答える。

「僕も。」

グレイも後に続く。

「ああー……だって、未来の目上の人だし、俺もそつするべきかなーと思つて…。今更変えられないし。」

……だからだそうだ。

「へ……へえ……。」

…そりやあまあ、3人とも一いつつ反応しかできないわな。

その後、暁文とグレイを部屋に残し、私と紅丞さんは2人でリビングへと向かつた。

部屋に入った瞬間、携帯のバイブがなった。

「あつ…誰だろ?」

ディスプレイに表示されたのは、知らない人の電話番号。陸のは先日登録したし……。

出てみた。

「あつ、あのつ、もしもし……?」

…夏子だった。

## 電話

「もしもし、夏子？」「どうかした？」

「あ、よかつた。あつてた。」

「？」「どうじこと？」

「あの……電話番号を教えてもらひとせし、口頭だったもので、あつてるかどうか不安で、確認がてり電話してみたんです。」

「あ、そうだつたんだ？」

「はい。……あの、お忙しかつたらすみません。」

「いや、かまわないよ、ちゅうど暇だつた。」

「そうですか？……それじゃあ、あの、一つ訊いてもいいですか？」

「いいよ。」

「えつと……安藤さんつて、何部なんですか？」

「え？……演劇部だけじ、どうかしたの？」

「いえ……なんでもないです、ありがとついぞこました。そ、それでは、失礼します。」

「あ、うん。また明日ね。」

「はい、また明日。」

そう言つと、夏子は電話を切つた。

「未来、誰からだつたんだ？」  
紅丞さんが後ろから呼びかける。

「学校の同級生からですよ。」

そう言いながら携帯をポケットにしまつ。

「同級生……そう言えば、今日、どうだつたんだ？ 同級生の、その……反応は。あ、いや、言いたくなかったら言わなくともいいんだけど……。」

「大丈夫でしたよ、みんな優しかつたです。」

不安な表情を浮かべる紅丞さんに、笑顔で答える。

「……そつか、よかつたな。」

紅丞さんも笑顔で答えてくれた。

勘違い？

朝。玄関にて。

「それじゃっ、紅丞さん、行きましょっか。」「

未来が俺の手を掴んで引っ張るつとする。

「あ、未来、ちょっと待つて……。」

「え、どうかしたんですか？早くしないと遅れちゃいますよ。」

「それが……さつき、聴覚がパワーアップしたみたいで……。」

「じゃあ外に出られないじやないですか……うーん……。」「

何やら悩んでいるようだ。

「未来、俺、別に後から行つても大丈夫だから。先に行つてもいいし。」

「いや、そうじゃなくて……私、紅丞さんと一緒に学校に行きたいんです。」

「…………え？」

「何それ、え？てことは……え？これ、”甘えてる”ってことでいいのか？」

顔が徐々に熱くなる。

「……紅丞さん、顔真っ赤ですけど、何かよからぬことでも思っているんですか？」

未来が俺を睨む。

「い、いや、まさかそんなこと……。」

「……とにかく、私、思ったんですけど、ランダムに五感がパワーアップするわけじゃないと思うんです。」

「と、いうと？」

「私はほら、出血で性別が変わりますし、それを最初は”大けがする”と性別が変わる”って勘違いしてたんです。」

だから紅丞さんのも、もしかしたら勘違いかも知れませんよ？」

確かに、カラスは”紅丞には特殊な力がついた”とか言つただけで、ランダムで五感がパワーアップするとは言つていない。

「……でも、実際、ランダムにパワーアップしてるし……。」

「それも、気付かない所でキッカケがあるのかもしれませんよ。……：ちょっと私、”ある事”を思いついたんで、目、瞑つて下さい。」

「え、こう？」

目を瞑る。

「失礼します。」

未来がそう言つた直後

唇に、柔らかい何かが触れた。

そして

キィィィーン……

酷い耳鳴り。

一瞬、何が起きたのかわからなかつた。

聴覚が元に戻り、俺が目を開けるのと同時に、未来が俺から離れた。

「あつ…………。」

茫然とする俺。

未来は恥ずかしそうに俯き、上田使いで俺に尋ねた。

「…………ど、どうでした？その……聴覚、元に戻りました？」

「え、あ、ああ…………。」

ヤバい、顔が熱い。すごく恥ずかしい。

つていうか、ある事つて、キスのことかな……びっくりした。

「…………てことは、どうやらキスで元に戻るみたいですね。」

「そ、そつか？」

「そう言つことにしておきましたよ？それじゃ、行きますよ。」

未来は俺の手を引っ張り、家を出た。

## 手紙　その2

「……あれ？」  
クラスに1番乗りし、机に教科書を詰めよつとしたら、あるものを見つけた。

それは 手紙。

まさか……あのメイズつていう吸血鬼から？と思つたが、それは違つた。

封筒には小さく、”赤崎夏子”と書かれていた。

……夏子が、私に？…直接言えればいいのに…。

封筒を開けると、中から2つ折りにされた紙が出てきた。

その内容を見て、驚愕した。

『突如、このような手紙を送つてしまい申し訳ありません。安藤さんの性別の事と、私の事で、少しお話があります。

今日は運動部も演劇部も休みだと伺いましたので、本日放課後、体育馆で待っています。赤崎夏子』

詳しい内容は割愛するが、大体このような内容の文章が書かれている。

…… 一体何の用だろう？

その日は一日授業に集中できなかつた。

私の性別と、夏子の事……一体何の関係があるのであつ?

そしてやつてきた、放課後。

私は体育館へとやつて來た。

バレー部やバスケ部の練習試合などによくうちの高校が選ばれるほど、造りがいい体育館。

夏子は、そこのバスケットゴールの下に立つていた。 手には、どこから持つてきたのか、バスケットボールを持つてゐる。

「…………夏子?」

「あっ、安藤さん。」

私に気が付いた夏子は、ゆっくりと歩いて近付いてきた。

「いきなりお呼びして申し訳ありません…どうしても今日、お話ししたいことがあつたんです。あ、お時間は取らせませんので。」

「いや、帰つても暇だから大丈夫だけど……そんなに大事な話があるの?」

「はい。安藤さんの、性別の事について、色々訊いてもよろしいで

すか？」

「えっ、な、何？」

「……その、アルトから聞いたのですが、安藤さんも、吸血鬼のパートナーをなさっているんですね？」

「あ、うん……そうだけど……。」

「それで、あの……安藤さん、人間が成人を迎える前に、吸血鬼の血を飲んだらどうなるか…ご存知ですか？」

「知ってる。人間じゃない力を手に入れる事になる。」

「そうです。…私が何を言いたいか、解りました？」

「うん。……要するに夏子は、私のこの性別が変わる体质は、吸血鬼の血を飲んだことによつてついたものだ…って言いたいんだよね？」

私の言葉に、夏子はしつかりと頷いた。

「……そつか…いや、間違つてはいないよ。確かに私の体质は、小さいころに暁文の血を飲んだ事によつてついたものだけど…。でも、それと夏子がどう関係しててるつて言うの？」

確かに、手紙では”私の性別と夏子の事”と書かれていた。

「そのこと…なんですけど、あの、驚かないで聞いてもらえますか？」

夏子は俯きながらそう言った。

「大丈夫、ちゃんと聞いてるから。」

「あ、ありがとうございます、あの突如、夏子は顔をあげ、こう言った。

「私、  
実は、  
幽霊体質なんです。」

## ダンクシート

幽霊体质と聞いて、思い浮かべるのは、幽霊が見えたり、幽霊の声が聞こえたりする人。

でも、夏子が言つ幽霊体质とは、そつ言つことではないらしい。

「私の身体も、ある意味普通じゃなくて……その……安藤さんのように、吸血鬼の血を飲んでしまったせいで、特殊な力が身についちゃつたんです。」

「それが、幽霊体质？」

「はい。……あの、私、あまり自分の体质の事を人に話したことが無いので、上手く説明できないので、ちょっと”実演”してみますね。」

「じ、実演？」

「はい。」

夏子はそう言つと、持っていたバスケットボールをその場で何度もバウンドさせると、バスケットゴールへ向けてドリブルして、ゴールの真下で大きくジャンプし

見事な、ダンクショートを決めた。

「えっ！？」

バスケの試合のテレビ中継でも見たことなかったダンクショートを、まさかこの田で、しかもこんな間近で見られるとは思ってなかつた。

夏子はボールを両手でホールの中に押し込むと、ボールよりも僅かに遅れて床に着地した。

「はあ……はあっ……。」

少し、息が上がっているようだった。

そのままくぐりと私の方を向き

その場に倒れた。

「夏子！？」

慌てて駆け寄る。

「夏子、どうしたの！？」

まさか、いきなりダンクショートなんてしたから、体調不良でも起こしてしまつたんじゃないだろうか？  
ゆっくりと抱きかかる。

その後

「あ、私は大丈夫です。」

夏子の声が、”別の方向から”聞こえた。

「……え？」

恐る恐るその方向を見る。

そこには、”少し半透明”になつた夏子が立つてゐた。

## ダンクショート（後書き）

友人がバスケットボール持ってるときは必ず「ダンクダンク！！」って叫ぶ私。

「あ、あの、安藤さん、幽靈とか平氣ですか？」

夏子は私を見下ろしながらそう言った。

「……え、あ、いや、幽靈は平氣だけど……え？」  
あまりの事に頭がついて行かない。

確かに、夏子は今、私の田の前でダンクショートをかまして、そのまま倒れて……で、慌てて駆け寄つたら、夏子が2人いて、しかも片方半透明つて……どういう状態！？

「……これが、幽靈体质です。」

「え？……てことは今、夏子は、幽靈状態ってこと？」

「幽靈つていうか……身体から魂が抜けた状態って言えば、わかりますかね？」

「……あー、なんとなくわかった。今、夏子は身体から魂が抜けた状態で、バスケをするとその状態になるってこと？」

「いや、そう言うのではなくて……私、”心拍数が上がる”とその状態になる”みたいなんです。

だから私、運動禁じられて……ほら、私が体育やってるとこ、見たことないでしょ？」

「た、確かに……つていうか、どうやって元に戻るの？」

「しばらく時間が経つか、心拍数が一定まで下がれば元に戻ります。

「ふーん……でもさ、なんか、夏子が2人になつたみたい。」

「アルトにもそう言われたんですが、魂だけの状態だと、いろいろできないことも多いみたいなんです。」

「出来ない」といつて?」

「例えば……。」

夏子は私に手を差し伸べた。

「触つてみてください。」

そう言わされたのでゆっくりと手を伸ばし、夏子の手に近付ける。だが、夏子の手には触れることができず、そのまま私の手は空を切つた。

「…………え?」

「……」の状態だと、他の物質に触ることができないみたいなんです。だから、自分の身体を運ぶことができないんです。

でも、逆に、壁とかをすり抜けることができて便利なんですけどね。」

夏子は照れ笑いを浮かべながらそう言った。

「じゃあ、今、夏子は身体の感覚がない……ってこと?」

「いえ、そう言つことではなくて……何て言つたらいいんでしょうか……その、私の身体の本体が触れているものの感覚は解るんです。魂だけが切り離された状態ですので。」

「身体の本体……ああー、なるほど。」

「解りました?……それで、他にも、この状態だと、周りの音が聞こえないんです。」

「聴覚が機能してないってこと?」

「はい。ですから、周りの音は身体の本体が聞いてるのを感じ取つていてる……ってことですかね。」

「なるほど……って、それじゃあ、目も見えないんじゃないの?」

「あ、それはないんです。ちゃんと目は見えますよ。」

「…………あれ?」

その後、夏子の身体が更に透けて見えた。

”見えた”んじゃない。実際に透けてるんだ。

「あ、そろそろ元に戻りますね。」

そう言い終える辽には、完全に消えてしまった。

「ん……うう……。」

夏子が田を覚ました。

「夏子、大丈夫？」

「あ……平気です、お手数おかけしました……。」

夏子と私はゆっくりと立ち上がった。

「私のことについての話はこれで終わりです。……納得してくれました？」

「うん。話してくれてありがとうございます。」

「どういたしまして。それでは、失礼します。」

夏子は律儀にお辞儀をすると、歩いて体育館を出て行つた。

幽靈体質か……凄いなあ、夏子……自分からその事を言つちやうなんて……。

私なんて、みんなに見られてよつやく、だからなあ……。

「……帰るかな。」

鞄を持ち、体育館を出る。

玄関まで行き、靴を履き替えよつとした、その時。

突如、視界が真っ暗になった。そして

「だーれだつー!?」

……という、元気な声。

「……陸?」

「あつたりー。」

視界が戻り、後ろを向くと、腰に手を当てながら満面の笑みを浮かべている陸がいた。

「陸……あんた、もう少しまともなことやりなさいよ……。」

「わりいわりい。それよりわつ、一緒に帰ろうぜ?」

「ん…別にいいけど。」

そつ言いながら靴を履き替える。

「よしつ、んじや、行こうぜ。」

陸は既に靴を履き替えていたので、さっさと先に行ってしまった。

## 誘い

「なんか、懐かしいなー。」いつもやつて一緒に帰るの。

「そうだねー。陸はいつも買い食いしてた。」

「で、未来はそれを注意はするんだけど、腹減つてゐるから結局一緒に買つちまつんだよな。」

「あの時の陸は今よりもしつかつしてた気がする。」

「え、やつ?」

「……とまあ、様々な会話を交わしつつ、私と陸は帰路についていた。

「……とにかくで、陸。」

「ん?」

「今はどこに住んでるの?」

「あー、それなー……。住んでるとこははだいたい未来が住んでるところの近く。……親離れしたんだ。」

「え、てことは、もしかして1人暮らし?」

「そういうわけじゃないんだけどわ……。」

何やら歯切れが悪い。

「……陸?」

瞬間、陸が私の方を向いて立ち止まった。

「あ……あのわつ、未来。今から俺の言つこと、信じてくれるか?」

「えつ?」

「な、なんなんだ今日は。夏子とこい陸とこ……。」

「し、信じるけど……何?」

「じ、じゃあ聞いてくれ。……未来さあ

「

そして、信じられないことを言った。

「もし、俺が”吸血鬼のパートナー”やってる”って言つたら、信じるか？」

何を言つてゐるのか、よく解らなかつた。

陸が　吸血鬼のパートナーに？

……いやいやいや、まだ”もしも”の話だ。まだパートナーをやつてない可能性がある。

「……」「めん、信じられない。」

「……そつか。じゃ、ついてきてくれ。」

そう言つと、陸は歩きだし、紅丞さんの家の方向とは別の方向へと向かつていった。

「…………。」「…………。」

互いに無言。

思えば、陸は先ほど、”吸血鬼のパートナー”と言つた。

吸血鬼は、知らない人から見れば、想像上の生き物でしかない。そんな生き物のパートナーの有無なんて、解るわけがない。でも、陸は確かにパートナーと言つていた。

……じゃあ、まさか陸は……。

「…………。」

そう言って、陸がたどり着いたのは、とある家の前。

「ここって……陸の家？」

私の言葉に、陸は小さく頷いた。

「俺、同棲してるんだ。吸血鬼と一緒に。：未来だってそういうして  
つて、その吸血鬼から聞いた。」

「……そつか。」

そういうえば、この”そつか”も、陸が昔、連呼してるのが移ったん  
だっけ……。

陸はゆっくりと扉を開け、私を家に招いた。

「ただい むぐつ！！」

”ただいま”と言いつぶやく終わる寸前で、俺は突如現れた何者かに押し倒された。

「うわっ！？」

未来が驚いて後退りする。

「陸ーつ、おかえりー。」

「お……おう…。」

何者か つていうか……メルにはどうやら未来が目に入っていいな  
いよつだつた。

「 つて、メル！？」

「うん？……あ、未来じやん。」

ゆつくりと立ち上がる。

「…………もしかして、陸の家に住んでる吸血鬼つて……メルの事だつた  
の！？」

「ん？……あー、陸が言つちやつたのか。うん、そうだよ。 よい  
しょつ。」

メルは俺を物のように引っ張り上げると、

「大体半年前からパートナーやつてもうつてゐんだよつ。」

笑顔で俺を抱きしめながらそう言つた。

「は、半年も前…から？」

未来は驚きを隠せないよつで、ずっと俺とメルを交互に見てゐる。

「んんつ……お前、離せつて！…！」

メルの腕を払い除け、脱出。

「ふうつ……半年前つて言つても、去年の9月からだからだけどな。

「え、それ、私もなんだけど。」

「え？ そつなのか？」

なんだ、未来と同じ期間か。なんか運命を感じる。

「凄い偶然だねー。」

メルは俺たちを見ながらニヤニヤしている。

「まあ、そういうわけで、俺、吸血鬼のパートナーやってるんだよね……驚いた？」

「うん……でも、ちょっと心配になつた。」「

「え、なんで？」

「だつてさ、陸が吸血鬼のパートナーなんて……」「うううのも変だけど、荷が重いよつな気がして……。」

「ああー……俺も最初はそう思つたよ。でも、やつてこいつに慣れた。……ちょっと強引なんだけどな。」

「私のどじが強引なのよー。」

メルが横で抗議してる。軽く無視。

「…………とにかく、その……俺、こいつこととしてるわけだけど、それでも、弟扱いしてくれるかな？」

どつちかつて言うと、小学校を卒業して、未来がいなくなつて、めちゃくちゃ寂しかった。

いや、恋仲がどーのこーのつていうことはないんだけど、いつも一緒にいた姉がないと物凄く寂しいもんだから…。

「もちろん。私もパートナーやつてるし。」

未来は笑顔で答えてくれた。

「それじゃ、陸。また明日、学校でね。」  
「おひ、またな。」

私は陸に背を向け、歩き出した。

「ただいまー。」

家に帰ると、グレイがリビングから飛び出しついた。

「おかえりー、未来ちゃん。紅丞が心配してたよ。」

「紅丞さんが?……あー……。」

確かに、今日は”用事があるので先に帰つていってください”と言つてはいたのだが、ちょっと時間かかりすぎた。もうすぐ夕方だ。  
「部屋にいるから、早く行つてあげて。」

「うん、解つた。」

駆け足で階段を上り、部屋に向かう。

ゆーつくりと扉を開ける。

「紅丞さん……?」

扉の隙間から顔を覗かせる。

「…………。」

紅丞さんは椅子に腰かけ、ジト目でこちらを見つめていた。

「あ、あの……遅くなつてすみませんでした……。」

「……いいから、入つてこいよ。」

部屋に入り、恐る恐る近付く。

紅丞さんは机の椅子に胡坐をかいして座り、私を見上げた。

「おかえり……でも、ずいぶん遅かつたな。」

「す、すみません…友人の家に行つてまして…。」

本当は従兄弟なんだけども。

「ふーん……その友人ってのは

「浮氣なんてしてませんから。」

「何も言つてないんだけど……。」

続けて質問しようとする紅丞さんの肩を掴む。

「あつ…！？」

怯んだ。

「…紅丞さん、私の事が信じられないんですか？」

「い、いやつ、そういうつもりじゃ……。」

顔がみるみる赤くなつていぐ。 そろそろかな。

「私は、紅丞さんだけを愛しています。」

真つ直ぐ目を見て、言つてやつた。

「あ……あ、ありがと…。」

紅丞さんは顔を真つ赤にして俯いてしまつた。

「どういたしましてつ。」

礼を言いつつ、抱きしめる。

「未来つ…。」

紅丞さんも私を抱きしめてくれた。 よし、完璧。

「……それじゃ、私、夕飯の準備してきますね。」

「あ、ああ…。」

紅丞さんは若干名残惜しそうに私を見送つてくれた。

いやあ、我ながらちよつと悪いことをしてしまつたと思つ。

でもまあ、紅丞さんはそれくらい単純で軽いってことは云はなかったと思つ。

「……なんか、すっぽり罪悪感が…まあいいや。」

独り言を喋りつつ、キッキンへと向かった。

**尋問（後書き）**

情けない男を見ると途端に紅茶を思い浮かべるよくなってしまひました

## 現実問題と猫

翌日、学校へ1番乗りした瞬間、先生に呼び出されてしまった。  
まあ、解つてはいた。性別の事だつてのは解つてはいた。逆に  
何故2日間も呼び出さなかつたのか不思議に思つていた。

「お前は女子生徒なのか？それとも男子生徒なのか？」

率直に、そう聞かれてしまつた。

「戸籍上は女性ですが……小さいころから不思議な力があつて……出血が原因で性別が変わることがあるんです。」

「……と、吸血鬼や、吸血鬼の血の事は内緒で、”不思議な力がある”つてことで話しを進めてもらつた。

ちなみに、その時の性別は 男。

……保健室の先生がやたら俺をジロジロ見ていたのが印象に残つてる。

とりあえず公になることは避けたかったので、学校の外に情報を出す事だけは何とか阻止し、

その他の問題（体育はどちらが、クラスでどちらが）は放課後に決めることとなつた。

……上記の事を、毎休み、一緒に毎食をとつていた綾子と夏子に云えた。

「……といつわけなんだが……どう思つ?」

「そうだねえ……未来はどうしたいの?男のままか女のままか。」

「俺は……隠す必要はもうないから、堂々としたことこりだけビ……」

それを聞いて、夏子が口を挟んだ。

「でも、まだ知らない生徒もいるんですね?……だったら女のままがいいと私は思いますよ?」

「……そうだな、じゃあ明日からはもう女子生徒のまま固定で行くよ。」

すると

「「ええー??.」」

と、複数の女子の不満の声。

後ろを向くと何やら不満そうな表情を覗かせた女子たちがこちらを見ていた。

「安藤さんは男の方がいいよ。」

と1人の女子が言ったのを筆頭に、次々にそつ言つた声が上がる。

「……未来、どうする?..」

綾子が目を細めてこちらを見る。

「……女子生徒のまま固定で。」

その後、先ほどのを超える女子の不満の声が出たことは言つまでもない。……なんで男がいいと思つたんだこいつ。

「あー……疲れたっ……。」  
人気のない廊下で背伸びをする。

：結局あの後、職員室で一通りこれからのことについて話しあつてのこ  
2時間もかけてしまつた。  
疲れた。

「あつ、安藤さん。」

廊下の角を曲がった先に、夏子がいた。  
「夏子、こんなところで何してんだ？」  
「安藤さんを待つてたんですね。」  
「俺を？……何で？」  
「なんとなくです。別にいいでしょ？」「  
「ん……まあいいけど。」  
「それでは、行きましょうか。」  
夏子は俺の前を歩きだした。

……ちよつと、引っかかる。

昨日、夏子は俺に、自分の幽霊体質を明かしてくれた。そして今も、俺の事を待っていた。

アルトの話によれば、夏子は”人見知りで人間不信”簡単に言うと、たいして命を狙われてもいないのに、無駄に自分を防衛したがるタイプ”だつたはずだ。

それなのに、会つてすぐの俺にここまで関わつてくるのは何故だ？  
まあ、確かに吸血鬼の血を飲んだことがあるやつなんてほとんどいないし、同じ境遇の人間は珍しいのかも知れないけど……なーんか引っかかる。

「ところで、安藤さん。」

「ん？」

「安藤さんってどこに住んでるんですか？」

「どこつて……少し前に家、来なかつたつけ？」

「いえ、日比野さんから、もう一つ家があるとお伺いしまして……。」

「あー……それな、ここから地下鉄で4駅離れた所にあるんだ。」

「4駅つて、結構遠いですね。」

「ああ。だから今、紅丞先輩の家に居候してんだけど、結構楽なんだよな。早起きして急ぐ必要もないし。

……夏子はどこに住んでるんだ？」

「家から学校が見えるところに住んでるんです。」

「へえー、つてことは、紅丞先輩の家よりも近いわけだ……。」

「そうなりますね。良かつたら、家、来ませんか？」

「え？…あ、『めん、今口はちょっと用事があるから無理。』  
用事つて言つたか、早く帰らないと今度こそ紅丞さんが拗ねてしまつ  
かもしれない。」

廊下で、上記のような会話をしつゝ、靴を履き替へ、学校を出た。

「あつ。」

門を出た瞬間、夏子が声をあげた。

「夏子、どうかしたのか？」

「安藤さん、あれ。」

夏子が前方を指さす。

そこにいたのは

猫。それも、真っ黒な黒猫だった。

「？…ただの野良猫じゃないのか？この辺じゃ珍しいけど。」

「それがですね…あの猫、”猫に見るんですけど、猫じゃない”んです。」

「え？どうこいつなんだ？」

夏子はその場にしゃがむと、両手をパンパンと叩いて猫を呼んだ。  
猫はゆっくりと夏子に歩み寄る。

夏子はそれを抱きかかえながら「うづづつ」と囁つた。

「実はこれ、アルトなんです。」

「…………はい？」

いや、どう見たって猫だし……。

「安藤さん、吸血鬼には、それぞれ特殊な力を持つている吸血鬼と、特殊な力を持つていない吸血鬼がいるって、聞いたことがありますか？」

「あ、なんか聞いたことがある…………。」

以前、”特殊な力を持つ者もいれば、血を吸うことしか能がないものもいる。”って聞いたことがある。

……つまり魔力の事かと思つていたけど……違うらしい。

「そうなんですか？じゃあ話が早いですね。……アルトの場合、”想像実現”がそれに当たるんです。」

「”想像実現”？」

「えっと……アルトの場合、契約した対象、つまり私にだけ使うことができるんですが、”私が想像した物質に変化することができる”んですね。」

「夏子が想像した物質…………てことは、そのアルトは、夏子が想像したからその姿になつてるって事か？」

「はい。…………つていうか、安藤さん。」

「何？」

「信じてくれるんですか？その…………私の話を。」

「うん。夏子が嘘つくわけ無いと思ってるから。」

そう言つた瞬間、夏子はかなり驚いた表情を見せた。

「えっ、あ、あの、それじゃ、私、この辺で失礼します…………。」

そして、恥ずかしそうに俯くと、足早に去つていってしまった。

## 現実問題と猫（後書き）

”猫”とパソコンで打った瞬間に（＝^・^＝）とか＝^—^＝と  
か出てきたんですが、これって何かの罠ですか。可愛いつ

驚いた。

それはアルトも同じなようだつた。

アルトは安藤さんに「赤崎夏子は人間不信だ。」と言つて云うてある。

「……てことは、人間不信<sup>イコール</sup>周りの人間に信じることができない。」  
「知り合つてすぐの人間にそう易々と自分のことや身の回りの事を教えない、もしくは嘘をつく。

……と言つような方程式は安藤さんの中にも出来上がつてゐと思つていた。

それなのに

「不思議だよね、アルト……。」

腕に抱いた黒猫に話しかける。

「……そうだな。」

猫の姿のまま、アルトは答えた。

「本来なら、想像実現の話をした時に、”証拠を見せろ”くらい言つてもいいはずなのにな。」

アルトは呆れたように答えた。

……そう、”証拠を見せろ”。私はもしかしたらその言葉を待つていたのかもしれない。

でも安藤さんは……あの人は疑つどころか、”夏子が嘘つくなわけ無いと思つてる”と言つた。断言した。

「これなら 成功するかもしない。」

「何企んでるんだ?」

「…………え?」

アルトの質問に、思わず変な声がでた。

「な…………何のこと?」

「とほけんな。俺が何も察してないとでも思ったのか?」

アルトが私を見上げる ルビーのような綺麗な目が、私を見ている。

「…………。」

私はまだ、人間不信から抜け出せていない。安藤さんも、田比野さんも、まだ信じることができない。

信じられるのは アルトだけ。アルトは、人間じゃないから。

「夏子、何を企んでいるのか、正直に話せ。」

ルビー色の瞳に見る私の顔は、暗い表情を浮かべている。

「……復讐する。安藤さんを利用して、あの男に復讐する。」

これは咄嗟に決めたことではない。

私が幽霊体質を明かした時から、この計画は始まっている。

## 馴れ初め

その町は、異常だった。

日本とは思えないほど治安が悪く、略奪、強盗、暴力沙汰……犯罪が日常的に起きていた。知らない人が見れば、無法地帯とも呼んでいたかもしない。

私はその町で生まれ育った。

小学校の頃は平凡に過ごすことができた。

でも、中学に進学した途端に、歯車が狂い始めた。

その学校では、妙な派閥争いが激しく、どの派閥にも属さない者は、周りからイジメにあう。というのがまるで伝統のように続いていた。

そして、私はどこも属す事が、出来なかつた。

……何が起こるのか、勘が悪い人でも解ると思つ。

夏の暑い時期。

「赤崎、コンビニ行つて万引きしてこい。」

また”あいつ”だ。またそつやつて私に犯罪を強要せせる。  
嫌な顔をすればナイフをちらつかせ、「怪我はしたくないだら?」  
と脅される。

だから、逃げた。

”嫌だ”と吐き捨て、”あいつ”の前から逃げた。

誰もいらないシャッター商店街をひたすら走る。後ろからは、”あいつ”と、そのトリマキが4、5人追いかけてくる。  
路地裏に駆け込み、捨てられている家具を足場に、屋根が低い建物  
の上に逃げる。

「くそつ！あの女、どこ行つたんだよー！」

「おー、もういいだろ、明日学校でやりやあーいじやん！」

下から”あいつ”とそのトリマキ達の声が聞こえる。

そつと屋根の上から覗いてみる。幸い、まだ気付かれてはいな  
い。

……とりあえず、ほどぼりが冷めるまでここにいるしかないなあ。  
住民には申し訳ないけど。

よこしょつ、と、その場に腰を下ろす。その後

「なんだあ？お前。」

「俺たち今ちよつといライライしてんだよねー。一発殴らせてくんねえ？」

トロマキ達の声。何事かと下を覗く。

そこには、一人の男を取り囲んでいる“あいつ”と他のトロマキ達の姿があった。

男の服装は、この蒸し暑い時期にまさかの真っ黒なコート。しかもご丁寧にフードまでかぶってて、顔は見えない。

なぜ男だと解ったのかといつと、トロマキ達が男を取り囲みながら「つてか、暑くないの？おーーさん。」と男を挑発していたからだ。

そういうじてている間に、男が、先ほど私が逃げ込んだ路地裏に連れて行かれてしまった。

見つかったらヤバい、とりあえず身を隠す。

数秒後、数回の誰かを殴る音と、物の壊れる音が聞こえ、路地裏から“あいつ”とトロマキ達が逃げていいくのが解った。

だが、男の姿が見えない。

ゆっくりと屋根から身を乗り出し、路地裏を確認する。

男は、路地裏の隅の方で 倒れていた。

「よいしょっ……。」

雨樋を伝い、路地裏に降りる。  
恐る恐る男に近付く。

「……だ、大丈夫ですか？」

小さな声で問う。

「んつ……。」

気がついたようだ。

地面に手を突き、ゆっくりと身を起こす。そして

「なんだ？お前……。」

男の目が、私を捕らえた。

その目は、正確には瞳は、人間の黒ではなく

鮮やかなルビー色をしていた。

「！？」

驚いた。人間ではないと、直感した。

「あ、あなた、一体」

何者？と言う前に、私の興味は別方向へと向いてしまった。

男の、脣。 血が滲んでいる。さっき、殴られたのだろうか。

「痛み……。」

男は私から目線を外すと、手の甲で血を拭おうとした のを無意識のうちに手を掴んで止めてしまった。男が驚いて私を見る。

男の口から覗く、赤い、綺麗な血　　”飲みたい”という衝動が湧いてくる。

手を掴んだまま、もう片方の手で肩を掴み、固定する。

そして、出目している間に、吸い付いた。

甘い。人間の血とは思えない。

「つーーー！」

瞬間、男が私を突き飛ばした。

「きやあっ！」

悲鳴を上げながら、私は後ろに倒れた。

……痛い……腰打った……。

ゆっくりと顔を上げ、男を見る。

男は、顔を真っ赤にしながら口を押さえていた。

「お、お前っ、今……。」

何やらあわあわしている。「……私、何かしました?」

「いやつー！自分のしたこと思い出して見るよー。」

男は、顔を更に真っ赤にして声を荒げた。

私のしたこと?

……確かに、唇から血が滲んでるのを見て、それで……あ。

直後、自分の顔が赤くなるのが解つた。

……どうやら目の前の相手がファーストキスの相手らしいです。

「うう、『めんなさい』…」頭を下げる。

「謝つて済むかああつ……これだから人間は嫌いなんだよつ……人間がどうとか言つてる。こりやヤバい。変なことに巻き込まれる前に、早々に切り上げなければならぬ。」

「あ、あのつ……わ、私、そろそろ失礼します……。」怒り心頭な男に背を向け、歩き出そうとした。

が、男に腕を捕まれ、止められた。

「なつ……なん、ですか…?」

声が震える。心拍数が急速に上がる。

「お前、大丈夫か？」

「…え？」

振り向く。

「大丈夫って……どうこう事ですか？」

「いや、だから……あ、そうか。お前、俺のこと知らないんだな…。」

「?……いつたい何のことですか?」

「うーん……どつから説明すつかなあ…。」

何やり悩んでいるようだ。

「あ、あの……帰つても、いいですか?」「ん、駄目。」

「えつ……。」

「悪いけど、お前をそのまま帰すわけには行かない。俺の血を飲んじまつたからな。」

「あ、あなたの、血?」

「そう。……だから、少し調べさせてもらひつい。」

そう言いつと、立ち上がり、両肩を掴んできた。  
顎に手を添えられ、くいっと上を向けられる。

「えつ……?」

男と田が合う。その顔は、とても顔立ちがよく、ルビー色の瞳は、心を見透かされそうなくらい綺麗だった。

「あ、あのつ……。」

振り解こうとするが、肩をがつちりと掴まれ、身動きがとれない。

「……じつとしてる。」

低音の、恐ろしい声が耳に届く。

怖い。今すぐ逃げたい。

「い……嫌あつ……!」

先ほどされたように、男を突き飛ばし、走り出した。

「つ……おい……!」

後ろから男の声が聞こえるが、構わず路地裏を抜ける。

”あいつ”から逃げ切ったかと思えば、今度は見知らぬ男とキス…  
…今日はついてない…。と思った、その瞬間。

「あつ……?」

身体の力が抜け、その場に転んだ。

「痛つ……。」

立ち上がり、膝の砂を払おうとして、気が付いた。

身体が、透けている。

「…………え？」

試しに、顔の前に手をかざす。

向い側が見えた。

「ど、どいつなつて

その時。

「あーあ…………だから言つたのに。」

さつきの男の声。恐る恐る振り向く。

そこには、呆れたような表情を浮かべている男がいた。そして、そ  
の足元には

”私”が倒れていた。

## 馴れ初め その2

「え……？」

今、私の前に、私が倒れている。

そして、そんな私を、コートを着た男は、呆れたような表情で見ている。

「はあ……だから言つたのに……めんどくせえ……。」

「い……今、私、どうなつて……。」

声が震える。

「そうだなあ……簡単に言えば、”身体から魂が抜けた状態”ってとこだな。」

「た、魂！？」

「そうだよ……つたく、大声出すなよ。その姿、他の奴らに見られたくないだろ？」「うん。」

「そ、そうだけど……。」

敬語を忘れるほど、今の私は動搖しきっていた。

「……で？どこから話す？”俺が何者なのか”か、”今自分に何が起きているのか”か。」

「こ……後者で。」

「よし……じゃあ、ちょっと失礼。」

そう言つと、彼はつづぶせに倒れている私の身体に右手を近付け、首筋に触れた。

「つー？」

瞬間、首筋に、”何か”が触れたような感覚がした。

首筋を触つて確かめてみるが、何もない。

「えつ……！」

驚いて、彼を見る。

「今、何か感じるか？」

「く、首に何か当たつてるような……。」

「ふーん……なるほど。」

安心しろ。それは俺の”手”だ。」

「えつ？……でも、あなたは今……え？」

「”魂は切り離されていても、感覚は残つてゐる”って事だ。解るか？」

「え、えーっと……何となく解る……。」

つて言うか、声が聞こえてくる方向も、前方からではなく後方から聞こえるから、多分触覚と聴覚は向身体こいつから来ているんだと思う。

「なるほどな……よいしょつ。」

彼は突如、私を仰向けにすると、お姫様抱っこした。

「きやつ！？」

思わず声がでた。

「そんな声出さなくともいいだろ……こんな所に寝てると不自然だ。行くぞ。」

彼は私に背を向けて歩き出した。 私も後に続く。

……魂だけのはずが、かなり感覚がリアルに伝わつてくる所為で変な感じがする。

「……とこひでお前、名前は？」

「え？あ……赤崎夏子。」

「夏子か。俺はアルト。」

「アルト……つて、日本人じゃないの？」

「まあ、そこら辺はあとで説明してやる。……これから、長い付き合いになるかもしれないからな。」

「えつ……？」

「どうじいじひと?と聞き返す前に、アルトがこちらを向いた。

「……といりで、お前ん家つてどい?」

「えつと……つて、そんなこと聞いてどいつするの?」

「決まつてんだろ、家まで送るんだよ、お前の身体。……なんなら、その辺の公園にでも置いておくか?」

「えつ!あ、いや……じゃあ、家までお願ひ……案内するか?」

「じゃあ頼むわ。……親、いないよな?」

「うん。」

「こいだよ。」

到着したのは、新しくも古くもないアパートの一室の前。

「……小さくね?」

初めて来て最初の一言がそれか……。

「両親と私、三人暮らしなのよ……仕方ないじゃない。」

そう言いながら扉を開けようとドアノブに手を伸ばしたノブには触れなかつた。

「え?……あれ?……?」

が、

何度も手を伸ばしても、空を切るばかりで、触れるビードルが、感覚する  
らない。

「はあ……やつぱりな。」

咳きながら、私の身体を床におろした。

「……鍵は？持つてんだろ？」

「あ……えつと、左のポケットに……。」

おもむろにポケットを探るアルト。家の鍵を取り出し、立ち上がった。

「魂が抜けた状態だと、他の物質には触れないみたいだな。」

そう言いながら扉を開け、再び私の身体を抱きかかえると、そのまま家中の中に足を踏み入れた。

「自分の部屋とかあるのか？」

「いっちはん。」

部屋の前に立ち、扉を開けようとするが、やはり触れない。

「だつたら……えいつ。」

思い切って扉に体当たり。案の定すり抜けることができた。

「お前……もう慣れたのか。」

そう言いながら、アルトが部屋に入ってきた。

「半透明で、他の物質には触れない……なんか、アニメに出てくる幽霊みたい。」

入ってくるアルトを見つめながらふと思つたことを言つてみた。

「幽霊か……じゃあお前はさしづめ、”幽霊人間”ってことだな。」

アルトが私の身体をベッドに寝かせながらそう言つた。

「ゆ、幽霊人間つて……。」

「間違つてはいないだろ？」

「……まあいいや。ところで、あなたつて、何者なの？」

私の質問に、アルトはこう返した。

「俺か？俺は……ただの吸血鬼だ。」

もつ、あの日だけで何回”え？”と言ったのか、解らない。それほど、あの日といつ日は驚くべき事が多かつた。

アルトは、吸血鬼。

そして私は、幽霊人間。

人外同士だからこそ、息があった。

互いの悩みを、打ち明けることができた。

これ以上アルトとの馴れ初めを語る必要は無い。続きをまた今度にする。

”復讐”。その言葉を聞いた瞬間、確かにアルトは反応した。でも、それ以上は何も言わなかつた。

許可と受け取る。月曜日にでも実行する。

私を散々イジメ、挙げ句、高校にまでついてきた、1歳年下の”あ

いつ”に、復讐する。

## 誘い その2

月曜日、夏子の様子が変だつた。

話しかけても上の空。返事も何も無く、ただぼーっと天井と壁の境目あたりを眺めていた。

「夏子っ！――」

思い切つて肩の上に手を乗せながら呼んだ。

「わあっ！？……あ、安藤さん、どうかしましたか？」

「夏子……それ、こっちの台詞。もう下校の時間だよ。」

「え？……早いですねえ、さっきまでお昼休みだったのに。」

「なんか、夏子、今日変だよ？具合でも悪いの？」

「いえ、何でも……あ、そうだ。安藤さん、今日は部活、ありますか？」

「無いよ。部活があるのは明日から。」

「それならよかつた。今日、ちょっとお願ひがありまして……。」

「え、また？……いいけど。」

「ありがとうございます。それでは、体育館倉庫に来ていただけますか？」

「そ、倉庫？」

「はい。それでは、失礼します。」

夏子は立ち上がり、礼をすると、足早に教室を出て行ってしまった。

## 疑惑

私たちが通う高校は、体育館倉庫が外にある。中は以外と広く、椅子もいくつかある。靴を履き替え、倉庫へ向かう。すると

「未来つ……」

道中にある茂みから、聞き慣れた声が聞こえた。

「えつ……？」

その方向を見る。

直後、茂みがガサガサと動き、中から一匹の黒猫が現れた。  
黒猫の目が赤い アルトだ。

「アルト！？……」んなところで何してんの……？

アルトはゆっくりと私に近付いた。

「何つて……別に何でもいいだろ。」

私はとりあえずアルトに近寄るため、しゃがむ。

「吸血鬼が学校来ちゃだめでしょ……」つていうか、暁文に声似すぎ。

「そこには気にはすんな。……夏子は？」

「そこ。」

10メートル先にある倉庫を指さす。

「今、ちょうど呼び出されたの。」

「ふーん……。」

アルトは私の鞄を見つめると、突如、半開きになっている私の鞄の中に潜り込んだ。

「わつ！？……ちよつ、アルト！？」

「悪いっ、少しの間だけでいいから、中に入れてくれ。」

「えつ……荒らさないならいいけど……」

「ありがと。……あ、このこと、夏子には絶対内緒で。

「なんで?」

「なんでって……何となく。……とにかく、頼んだぞ。」

アルトは右の前足で器用にチャックを閉めた。

「つたく……仕方ない……。」

立ち上がり、夏子が待っている倉庫へと向かった。

倉庫の扉を開けると、倉庫内に夏子が倒れていた。

「な、夏子!?」

慌てて駆け寄り、抱きかかえる。

「安藤さん。」

直後、後ろから夏子の声が聞こえた。

「夏子……また、魂抜けちゃったの?」

振り向きながら答える。

「ええ、まあ……お恥ずかしい限りで……。」

夏子は恥ずかしそうに頭を搔いている。

試しに、首辺りに指を当ててみた。

確かに、脈が速い。心拍数が上がると魂が抜ける、というの  
は本当のようだ。

「あ、あの、安藤さん。そうされるとすぐ困ったいんですけど……。

「あつ、じめん。」

「いえ、大丈夫です。それで、お願ひなんですが……今から30分  
ほど、私の身体を預かってもらえないませんか？」

「え？……どこか行くの？」

「はい。」

「でも、誰かに見つかりでもしたひ……。」

「平気です。今は下校時間なので、生徒は少ないですし、何かあつ  
たら壁をすり抜け逃げれば大丈夫です。それでは、失礼します。」

夏子は軽く礼をすると、走って倉庫の入り口をすり抜けて行つてしまつた。

「んじやあ、とりあえず……。」

夏子を抱きかかえ、近くのソファに寝かせる。

そのままアルトの入つた鞄を少し半開きにして、倉庫の隅に置いた。

魂が抜けた時の夏子は、一見すると眠つてるようになしか見えない。  
浅くはあるが呼吸はしているし、心臓も動いている。

不思議だなー、幽霊状態つて……。

ふと、横目でアルトの入った鞄を見てみた。

アルトは半開きになつた鞄から顔だけを出して夏子を見ていた。

無駄に可愛い。

どうしたの？と声を出しあうになつたが、それだと夏子にアルトがここにいることがバレてしまう。

とりあえず手招きする。が、首を左右に振られ、拒絶された。

刻々と時間だけが過ぎていく。

夏子は、一体何をしにビームへ行つたのだらう？

そろそろ約束の30分が経とうとしている。

思えば、何故夏子は私に身体を預けたりしたのだろう？

人間不信なら知り合つてすぐの私に自分の身体を預けたりするだろうか？

もしかして、利用されてる？

……いや、まさか。

あんな性格のいい夏子が、人を利用するわけ無い。

「……夏子、そろそろ30分経つよ。」

呼びかけるが、返事はない。でも聞こえてはいるだろ。

すると、

ガサツ

アルトが鞄から飛び出してきた。

そして

「夏子！いい加減にしろー！」

突如、怒鳴り始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9628z/>

---

性別人間と幽霊人間

2012年1月8日18時46分発行